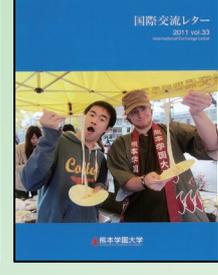
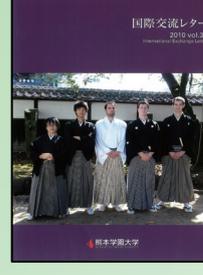
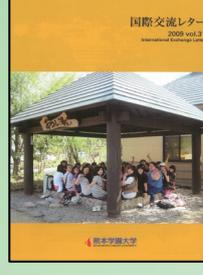
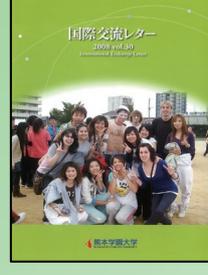
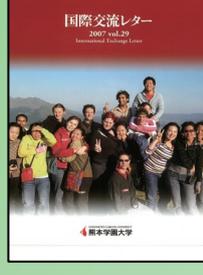
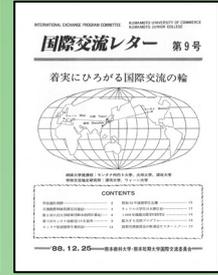
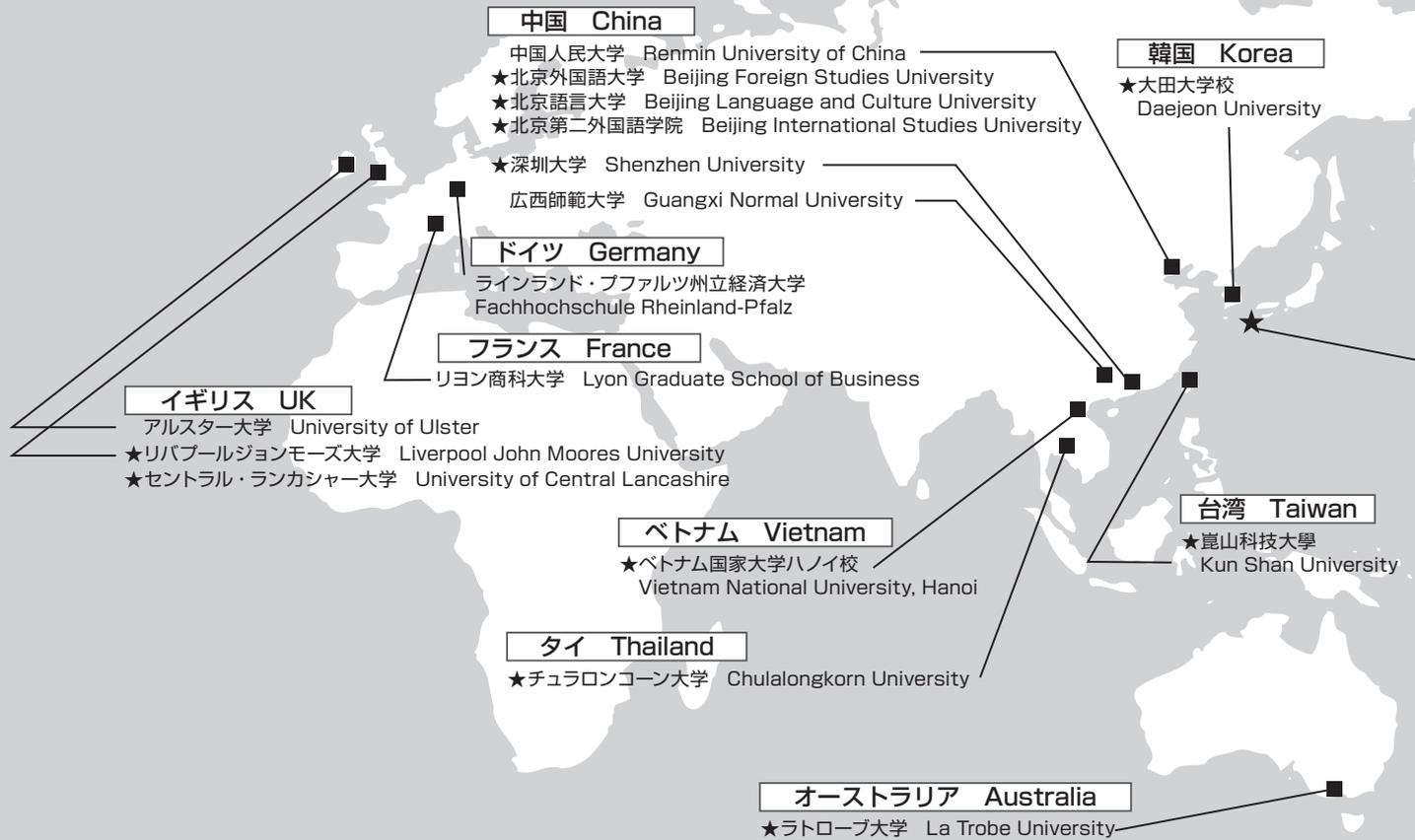


2012 Vol.34





目次

学校法人熊本学園創立 70 周年記念

2

創立 70 周年記念式典祝辞

アメリカ・モンタナ州立大学

韓国・大田大学校

中国・深圳大学

ホームカミングデー

国際交流の広場

国際交流 30 周年にあたって

6

国際交流委員長

司馬 公 周

歴代国際交流委員長

商学部教授 中野 裕 治

外国語学部教授 佐藤 勇 治

歴代国際交流センター事務室長

喜佐田 智 子 田 中 和 穂

西 村 禮 二 星 子 三 郎

岡 村 健 一

留学して考えるこれからあなたのできることに

14

白 角 勇 介 (英米学科 3 年)

韓 籥 (中国・深圳大学)

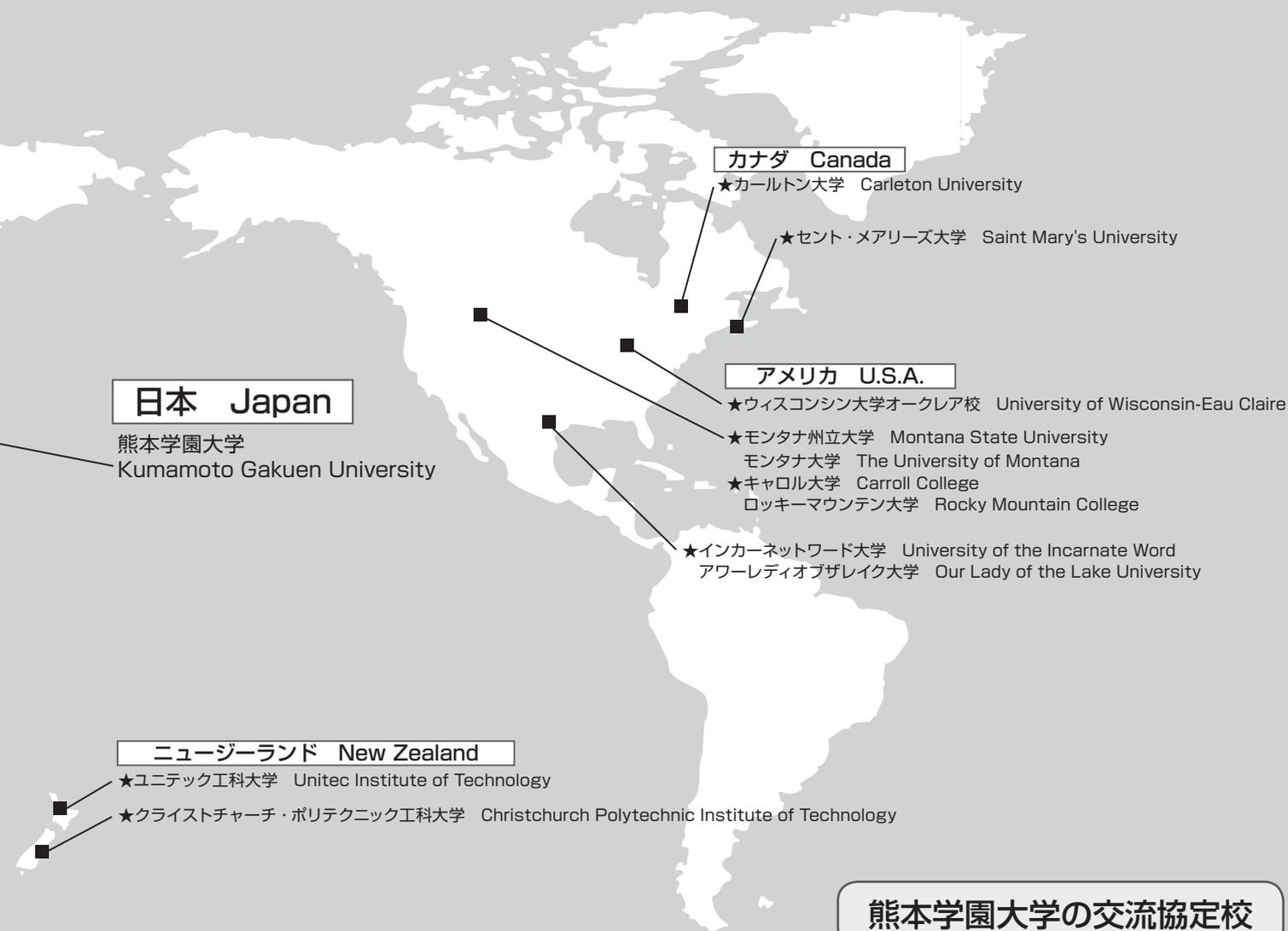
田 尻 彩 (東アジア学科 4 年)

Kelsee McVey (アメリカ・インカーネットワーク大学)

東 晃 弘 (国際経済学科 2 年)

Dinh Thi Hong Duyen (ベトナム・ベトナム国家大学ハノイ校)

橋 本 唯 (子ども家庭福祉学科 4 年)



熊本学園大学の交流協定校

★は現在の姉妹・協定校

交換教員	朴 興 植 大田大学校教授 (韓国・大田広域市)	18
留学生紹介	王 童 (社会福祉学部福祉環境学科)	19
国際交流写真館		20
TOPICS	新協定校紹介 セントラル・ランカシャー大学 (イギリス) 第 22 回外国人留学生弁論大会	22
DATA	平成 24 (2012) 年 海外往来 平成 24 (2012) 年度 出身国・地域別外国人留学生数 平成 24 (2012) 年 留学生参加行事 交換教員往来・研修団往来 派遣一覧 受入一覧	23



CONGRATULATORY ADDRESS

David J. Singel

Associate Provost

Professor of Chemistry & Biochemistry
Montana State University

祝 辞

モンタナ州立大学副学長 デイヴィッド・シンゲル

岩野茂通理事長、岡本忠也学長、理事並びに教職員の皆様、そして本日ご参列の皆様方の中で、熊本学園大学の記念すべき70周年の式典において、モンタナ州立大学を代表して祝辞を述べさせていただきますことを大変光栄に存じます。

本学学長であるクルザード博士は残念ながら本日出席することは叶いませんでしたが、岡本学長はじめ熊本学園大学関係者の皆様方にくれぐれも宜しくお伝えして欲しいとお祝いの気持ちを送って来ております。また、これまでの熊本学園大学からのご厚誼に対し心からの賞賛と謝辞を直接伝えて欲しいという学長の指示で、本日がここに代理で参った次第です。

本日は熊本学園大学の創立70周年のお祝いの日でございますが、この夏、熊本学園大学とモンタナ州立大学との姉妹校提携締結30周年を迎えます。モンタナで育ち、駐日大使に任命される前には米国上院多数党院内総務を務めた、マイク・マンズフィールド駐日大使の構想と指導によって、熊本学園大学とモンタナ州立大学の姉妹提携を含む形で熊本県とモンタナ州の間で、姉妹提携が1982年7月22日に結ばれました。この30年の歴史の中で、学生交流、短期研修プログラム、交換教員制度等で両大学の間では、文字通り数百名を超える両大学の若人、教職員がこの交流プログラムに参加してきました。この伝統のうえに、今秋、本学の現代語学・現代文学学科に神本忠光教授を迎えることを大変嬉しく存じます。これまでの活動に携り、モンタナ州立大学では日本への関心が高まり、日本を関講するまでになりました。また、これまでの交流が縁で結婚された方も数組おられ、新しい命も誕生しています。更に、両大学間の交換留学に参加した学生が、相互の大学で職員や教員に就く例もあります。例えば、貴学卒業生のマキコ・ディール(旧姓田中)さんは、今、本学の国際交流事務所で素晴らしい仕事をしてくれています。両大学の尽力により、多くの学生達が、また教職員の中にも、かけがえのない知識を得、人生を変えるような体験をしてきたことだと思います。

我々の関係は今後益々重要なものになってくるものと思われま。『日米の関係は、間違いなく世界中で最も重要な二カ国間関係である』とマイク・マンズフィールド駐日大使は述べておられますが、いま我々のいる2010年代は国際的に益々複雑化しています。日本とアメリカはまだまだ大国の地位を保っていますが、ブラジルや中国、インド、インドネシア、ロシア、南アフリカ共和国、トルコなどが先進国の仲間入りをしているのは周知の事実であります。世界中にある大学と協力し、手を携えて、日米の私たちの学生たちが、現代の複雑に多様化し、ポーダレス化が進む世界に対応していけるよう、我々は新しい形の国際交流の方法を探る時代に差し掛かっているように思えます。我々モンタナ州立大学は、この混沌とした世界情勢の中で、これからの70年を特徴づけるこのような国際的課題に対応できるよう、熊本学園大学と一緒に取り組んでいくことを楽しみにしております。

結びに入る前に、ひとつご案内をさせていただきたいと思っております。アメリカ合衆国は、2012年11月11日の週を国際教育週間と定めています。本学ではその一週間、日本に焦点をあてた活動を企画しておりますので、是非、お祝いと知識共有のため皆様にボースマンにお出でいただきたいと思ひ、ここにご案内申し上げます。誠にありがとうございます。

学長はじめ教職員、並びに学生の皆様方、貴学の創立70周年、誠にありがとうございます。本学は次の70年が、これまでの70年と同様輝かしいものとなるよう貴学と共に歩んでいくことを楽しみにしております。

Ambassador – an agreement was signed on July 22, 1982 between the State of Montana and the Prefecture of Kumamoto which included establishment of a partnership between Kumamoto Gakuen University and Montana State University. Over these 30 years literally hundreds of young KGU and MSU students and many faculty and staff members have taken part in exchange programs between our institutions – student exchanges, short term group programs, visiting professorships, etc. Carrying on this tradition, it will be our pleasure to welcome Professor Tadimitsu Kamimoto this fall as a scholar in residence in our Department of Modern Languages and Literatures. Due to these activities, interest in Japan has grown at MSU and we now offer a Japan Studies Program, allowing MSU students to focus their studies on Japan. Through our collaboration we are jointly responsible for several marriages, and probably several children. Student exchange participants from both sides have taken up staff and faculty positions at the other. For example, one of your graduates, Ms. Makiko Diehl (formerly Tanaka), is now doing excellent work for us in the MSU Office of International Programs. Through our efforts together, many of our students (and perhaps even some of our faculty) have gained valuable knowledge and life-changing experiences.

Our partnership will surely grow in importance in the coming years. As Ambassador Mansfield said, “The U.S.-Japan relationship is the most important bilateral relationship in the world, bar none.” However, we are entering a period of far greater international complexity in the second decade of the 21st Century. Although Japan and the United States retain their positions as major powers, we are seeing the emergence of many others to join the ranks of leading nations, including Brazil, China, India, Indonesia, Russia, South Africa, and Turkey. Working together, and reaching out to other institutions around the globe, we need to develop new approaches to international exchange to prepare our students, both here and in the U.S., for this complex, multilateral, borderless world that is taking shape before our eyes. We at MSU look forward to working with KGU to respond to the international challenges of this complex world which will characterize our next seventy years.

Before closing I would like to issue an invitation. The United States has designated the week of November 11, 2012 as “International Education Week.” We at MSU will be devoting that week to activities focusing on Japan, and we invite you to join us in Bozeman for this week of celebration and knowledge sharing.

Congratulations to the leadership, faculty, staff, and students of your fine university on this, its 70th anniversary. We look forward to working with you to make the next seventy years as successful as your first seventy years have been.

Dear Distinguished Chairman Iwano, President Okamoto, Members of the Board of Directors, faculty, and honored guests, it is a privilege and a pleasure to be here today to extend Montana State University’s congratulations to our special partner, Kumamoto Gakuen University, on the occasion of its 70th anniversary.

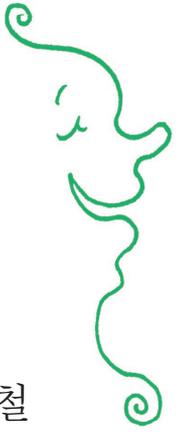
Unfortunately, our President, Dr. Waded Cruzado, had unbreakable commitments that prevented her from being here today, but she sends her best wishes to you, President Okamoto, and to the entire KGU community on this very special day. She asked me to join you here in Kumamoto today to communicate in person our sincere commendation and gratitude for the wonderful partner you have been to MSU.

Although our attention today is properly focused on the celebration of KGU’s 70th anniversary, this summer will also mark the 30th anniversary of the partnership between Kumamoto Gakuen University and Montana State University. Through the vision and leadership of U.S. Ambassador to Japan Mike Mansfield – a distinguished Montanan who rose to the position of Majority Leader of the United States Senate before his appointment as



축사

대전대학교 총장 임용철



祝 辞

大田大学校総長 林用哲

私は、大韓民国・大田大学校総長の林用哲と申します。九州の内実ある名門私学へと発展しつつある学校法人熊本学園の創立 70 周年を心よりお祝いたします。本日の記念式典に私どもをお招きくださった岩野茂道理事長様と岡本恵也学長様に大田大学校訪問団を代表いたしまして、深く感謝の意を申し上げます。

1985 年に新設された大田大学校が熊本学園大学と姉妹校の提携を結びましてから、早や 27 年になりました。その間、活発に続けられたきた教授間および学生間の相互交流と相互協力が両校の発展に大きく寄与しましたことはもちろんのこと、お互いの間に親しい兄弟関係のような友愛を感じるほどに、厚い友情関係と堅い協力関係が築かれてきましたことは、誠に喜ばしい限りです。特に、情報化および世界化へと進んでいる知識基盤における現在社会を構築するにあたって、両校間の国際交流協力の意味と役割は、これまでのどの時よりも大きくなっていると考えます。

これまで大田大学校は、貴校との交流協力を通じて大学の国際的視野を広げてまいりました。また、大学の発展的位相の定立という面で、非常に得るものが多かったと考えております。

この場をお借りしまして、最初に熊本学園大学と大田大学校の姉妹校締結を決めてくださった当時の北古賀勝幸学長様と故鰐淵健之理事長様、そして、今日までの厚い友愛関係と協力関係を築くにいたるまで大きな役割をしてくださった歴代の理事長様と学長様、さらに、現在の岩野茂道理事長様と岡本恵也学長様、および貴校の関係者の皆様に、厚く感謝の意を申し上げたく存じます。今後私どもは、貴校と大田大学校の友情関係と協力関係が持続的、かつ、さらなる発展を遂げますように最善を尽していく所存です。

最後となりますが、創立 70 周年を迎えました貴校が 5 月の生き生きとした新緑のように、力強くご発展なさいますことを祈願いたしますと同時に、この場にご参席の皆様方の今後のご健康とご健勝をお祈りしながら、お祝いの辞を締めくくらせていただきます。

안녕하십니까

저는 한국(韓國)의 대전대학교 총장 임용철입니다.

먼저 큐슈(九州)의 내실 있는 명문 사학으로 발전하고 있는 학교법인 구마모토학원(熊本學園)의 창립 70 주년을 충심으로 축하드리며 오늘의 기념식에 본인을 초청하여 주신 이와노 시게미치(岩野茂道) 이사장님과 오카모토 토쿠야(岡本恵也) 총장님께 대전대학교 방문단을 대표하여 깊이 감사드립니다.

1985년 신설 대학인 대전대학이 구마모토학원대학(熊本學園大學)과 자매결연을 맺은 이후 27년간 활발하게 이루어진 교수와 학생의 상호 교류와 협력은 대학의 상호 발전에 크게 기여하였음은 물론, 형제간의 우애를 느낄 만큼 돈독한 우정과 견고한 협력 관계를 구축하게 되었습니다. 특히 정보화, 세계화로 특징지어지는 지식기반사회의 구축에 있어서의 대학 간의 국제적 교류협력은 그 역할과 의미가 그 어느 때보다도 크다고 생각합니다.

그동안 대전대학교는 구마모토학원대학(熊本學園大學)과의 교류 협력을 통하여 대학의 국제적 안목을 넓히고 대학의 발전적 위상 정립에 있어서 많은 도움이 되었다고 생각하고 있습니다.

이 자리를 빌어 처음 구마모토학원대학(熊本學園大學)과 대전대학(大田大學)간의 자매결연 체결을 결정하여 주신 키다코가 카츠유키(北古賀 勝幸) 학장님과 고(故) 와니부치(와) 이사장님 그리고 오늘이 돈독한 우애와 협력 관계를 구축하기까지 큰 역할을 하여 주신 역대 이사장님과 학장님 그리고 현 이와노 시게미치(岩野茂道) 이사장님과 오카모토 토쿠야(岡本恵也) 총장님 그리고 구마모토학원대학(熊本學園大學)의 구성원 여러분께 심심한 감사를 드립니다. 앞으로도 저는 구마모토학원대학(熊本學園大學)과 대전대학(大田大學)간의 우정과 협력 관계가 지속적으로 그리고 더욱 발전할 수 있도록 최선을 다 하겠습니다.

끝으로 창립 70 주년을 맞는 구마모토학원대학(熊本學園大學)이 5월의 싱싱한 푸르름처럼 힘차게 발전하시기를 기원하고 이 자리에 참석하신 모든 분들의 앞날에 건강과 행운이 함께 하시기를 기원하면서 축사를 맺겠습니다.



学以致用，立业种德

中国 深圳大学 蒋道超

祝 辞

深圳大学 外国語学院長 蒋道超

尊敬する熊本学園理事長 岩野茂道閣下
尊敬する熊本学園大学学長 岡本恵也閣下
尊敬する熊本学園教職員の皆様、学生諸君、ご参列の
皆様方、こんにちは。

本日、熊本学園 70 周年を記念する創立記念式典に
参列することができましたことはこのうえない慶びで
す。貴学園創立 70 年来の教育、研究と人材育成の分
野において目覚ましい成果を収められましたことに心よ
りお祝い申し上げます。

熊本学園大学は、本学が日本において最も早く大学
間交流協定を締結した大学のひとつです。我が深圳大
学は、1983 年に創立し、創立間もない 1987 年 12
月に貴校と友好交流関係を結びました。両大学の主な
交流内容は、

1. 学生および教員の相互交換
2. 学術会議の共同開催
3. 深圳大学経済特区研究センターと貴大学海外事情
研究所との提携関係

25 年来、両大学の協力関係は、はかり知れない影
響をもたらしました。両大学間の交流において恩恵を
受けた教員そして学生らは、それぞれの専門領域にお
いて重要な役割を果たし力を発揮しています。人を教
え導き倦むことがない教育者は、学びを実際に役立て
よと説き、多士済々の人材を社会に送り出しています。
中でも公正な競争を重んずる企業家は、双方の利益享
受を重視し、目を見張る成果を挙げています。

日本の私立大学として、熊本学園大学は代々引継が
れてきた教育と学術の伝統により「自由闊達」、「師弟
同行」、「全学一家」の建学の精神を貫き、「九州一」
の大学という目標に向かい進んでこられました。

中国の経済特別区の新しい大学として、深圳大学
は、若々しい活気と新しいものを創り出していく精神
に満ちあふれ、中国高等教育の現代化に新たな道を探
り、新たな道しるべを確立するために力を尽くしてい
ます。両大学の協力は、人間本位の精神、学びを実際
に生かす、事業を興し徳を世に行うという教育の真の
価値を高度に体現しているのです。

深圳大学と熊本学園大学が学術、研究、教員の養成
と人材育成などの分野においてさらに協力を拡大し、
相互に補完し合い、共に探求し、独立と自由な研究精
神を発揚し、市民教育を担い、社会の大任を果たして
いくことを心から希望いたします。

最後に、学校法人熊本学園のますますのご繁栄と、
熊本学園大学教職員ならびに学生諸君のご多幸をお祈
り申し上げます。

ありがとうございます。

尊敬的董事长岩野茂道阁下，尊敬的校长冈本德也
阁下，尊敬的全体同仁和同学，各位来宾，大家好！

今天，我们非常高兴参加学校法人熊本学园的校庆
庆典。衷心祝贺熊本学园建校 70 年来在教学、科研和人
才培养方面所取得的显著成绩！

熊本学园大学是深圳大学在日本建立校际关系的最
早大学之一。深圳大学于 1983 年建校，不久即于 1987
年 1 月与熊本学园大学建立了友好合作关系，内容主要
为：

- 1、学生与老师的交换；
- 2、共同举办学术会议；
- 3、深圳大学经济特区研究中心与熊本学园大学海
外事务研究所结为友好合作单位；

二十五年来，两校间的合作影响深远。受惠于两校
交流的老师与同学已在各自领域发挥了重要的作用，其
中有诲人不倦的教育者，他们强调学以致用，现已桃李
芬芳；还有讲究公平竞争的企业家，他们重视双惠双赢，
现已取得瞩目成绩。

作为日本一所私立大学，熊本学园大学依靠一代代
传承下来的教育和学术传统，努力实施“师弟同行、自
由阔达、全学一家”的建校理念，保持“九州第一”的
目标；作为中国一所年轻的特区大学，深圳大学充满着
青春朝气和创新精神，竭诚为中国高等教育现代化探索
新路径，确定新航标。两校的合作高度体现了教育的核
心价值：以人为本，学以致用，立业种德。

我们真诚地希望，深圳大学和熊本学园大学将在学
术、课题研究、师资建设和人才培养方面扩大合作，优
势互补，共同探索，弘扬独立、自由的研究精神，肩负
起教育公民，服务社会的重任。

最后，祝愿学校法人熊本学园繁荣昌盛，祝愿熊本
学园大学同仁和同学幸福快乐！

谢谢！

おかえりなさい、思い出の学び舎に ホームcomingデー 国際交流の広場

熊本学園創立70周年記念事業の一環として、ホームcomingデーが2012年5月26日、学内キャンパスで開催された。本学の卒業生や地域の方々に足を運んでいただくような様々なイベントが開催されることとなり、本学に在籍する交換留学生の出身大学や出身国をポスターやスライドで紹介し、来場者が留学生と交流できる「国際交流の広場」を設けることになった。

韓国・中国・台湾・タイ・ベトナム・アメリカ・カナダ・ニュージーランドの8カ国・地域11大学からの交換留学生19名が協力してくれることになり、出身大学や出身国ごとに分かれ、大学や国を紹介するためにオリジナルのポスターを作成した。「英語ではこういう風に言いますが、日本語ではどう表現しますか?」「一枚では用紙が足りないのもう一枚ください。」などの留学生の協力的な姿に、どんなポスターが出来上がるのか期待はますます膨らんだ。授業の空き時間を利用してのわずかな準備期間であったにもかかわらず、出来上がったポスターは予想していた通りにどれも素晴らしく、目にする度に当日が待ち遠しく感じられた。スライドでは、本学の協定校である10カ国・地域19大学の紹介と留学生の1年間と題して留学生が参加した行事や活動の様子を上映することにした。是非多くの方に足を運んでいただき、大いに留学生と語り合っていたきたいという気持ちで準備を進めた。

ついに迎えた当日。キャンパス内は多くの催しで活気づいていた。一体どれだけの方が来場して下さるのか期待と不安が入り混じっていたが、1人また1人と足を運んで下さる方々の姿を目にし、不安は吹き飛んだ。



大田大学校訪問団と共に



参加した交換留学生

留学生も出身国や出身大学のことを知ってもらうと熱心に説明し、来場者からの質問にも時には



11号館正面にて（筆者は前列左）

真剣な表情で、また時にはジェスチャーを交えながら楽しそうに答えていた。ある来場者の方からは、「世界中からやってきた人々に一度に会うことが出来る上に、直接話が出来る機会は滅多にない。とてもいい時間を過ごすことが出来た。」とのお言葉をいただき胸が熱くなった。

卒業生や地域の方々以外にも、心待ちにしていた方々が来場してくださった。70周年記念式典への出席の為来日された本学の姉妹大学であるアメリカのモンタナ州立大学、韓国の大田大学校、そして中国の深圳大学からの訪問団であった。出身大学からゲストの方々をお迎えすることになり中には緊張した留学生もいたようだが、母語での話にも花が咲き、故郷を懐かしむ気持ちにもなったことだろう。訪問団の方々も日本で学ぶ留学生の姿を見て安心されたことと思う。

賑やかなひと時は、あっという間に過ぎた。改めて振り返ってみると、熊本学園創立70周年そして国際交流30周年でもある節目の年に、留学生の協力を得てこのような国際交流の場を盛り上げることができたことは大変感慨深かった。と同時に、30年にも及ぶ国際交流の歴史

の中で、多くの人々が時には困難を感じながらも言語や文化、人種を超えて相互理解を深めてきたということの素晴らしさを改めて感じた一日であった。

(田原亜矢子 記)



国際交流事業スタート 30 周年によせて

第 11 代国際交流委員長 **し ば こう しゅう**
司 馬 公 周

本学国際交流事業の本格的スタートを意味するものとして、1982 年におけるモンタナ州諸大学との姉妹大学締結は一つの象徴的な出来事でした。あれから数えて、今年が 30 周年という記念すべき年を迎えます。本学は今、世界の 18 の大学と交流協定を結ぶに至り、北米を始め、ヨーロッパ、東アジア、オセアニア、東南アジアの各地域をカバーしています。

第 11 代目国際交流委員長に就任したのは三年前、2010 年でした。日本は経済停滞、18 歳以下人口減という悩ましい課題を抱えるなか、大学も冬の時代の最中でした。こうした状況下で、全国的に学生が「内向き」の傾向にあると言われ、海外留学を目指す学生も、少なくとも数字の上では減少が見られました。他方、海外では、世界的不況に加え、英語圏を中心に、旧来の協定校における日本語学科や日本語コースの閉鎖が相次ぎ、本学との学生交換を継続することが困難だと告げられる大学も相次ぎました。そのなかでも、本学がイギリスにおける唯一の交流校である JMU との交流事業の中断により、イギリスにおける交流拠点を完全に失うことに危機感を覚えました。本学の国際交流事業は、いわゆる「草創期」、「拡大期」、「充実期」を経て、私の時代は「停滞の中での再生」に直面することになります。こうしたなかで、本学自体も単科大学から現在の 4 学部を有する総合大学へと発展したことに伴い、学部の専門性を生かした学部レベルの国際交流事業を求める機運が高まり、そのために、学部間協定を含む全学の国際交流事業の再構築、ないし交流事業が健全な形で発展していくことを保障する規程の整備が課題の一つでした。

委員会が最初に取り組んだのは、英語圏の派遣先を継続して確保することでした。委員会及び事務局の全面的支援と協力のもと、2010 年には CPIT (Christchurch Polytechnic Institute of Technology ニュージーランド) を訪問することができ、続いて 2011 年には、UCLan (University of Central Lancashire イギリス) を訪れる機会を得て、短期間で二つの大学と新たな協定を結ぶことができたことで、英語圏派遣先の不足をひとまず解消することができたことは喜ばしいことでした。同時進行のラトロープ大学との協定更新も困難を極めたが、粘り強い交渉の末、無事、協定の更新にこぎつけたことも、安堵に値することでした。学部間協定を含む国際交流協定に関する規程の制定も、長い時間を要するものとなりましたが、紆余曲折の末、教学部長及び 4 学部長の強力な支持を得て、ついに実を結んだことも感慨深い出来事でした。まもなく学部間協定の第 1 号が締結される予定ですが、本学の国際交流事業の新たな発展を象徴する出来事となります。

本学の今後の国際教育戦略にとって、次の諸点が重要だと

考えます。

第一に、世界はグローバル化が進む現在、国際教育は大学教育プログラムにとって標準装備の一つであることは言うまでもありません。また、入試戦略においても重要な役割を果たすものと言えます。本学のような地方中堅私立大学には従来に比べて志願者、入学者とも多様化する傾向にあります。本学における国際教育のプログラムも、中央の有力大学の単純な模倣ではなく、本学が直面する現実に向け、本学の実情にあった姿を模索しなければなりません。具体的には、入学してくる学生の多様な層に合った多様なプログラムを構築することです。いかにして相対的に意欲の高い学生をより多く取り込むことができるかが本学にとって今後の最大の課題と言えましょう。そのために、この層の学生に支持されるプログラムとは何か、冷静に分析し、追求する必要があります。現在の本学国際教育プログラムのなかで、こうした意欲の高い層の学生の希望にあったプログラムは必ずしも十分に用意されていないというのが、今、現場に最も近い私にとって切に感じるものの一つです。

第二に、本学の 30 年にわたる国際交流の歴史のなかで、全学の教職員の努力のもと、全学、または学部レベルでさまざまなプログラムが整備され、国際教育の発展に大きく貢献してきました。他方、プログラムの重複、非効率性の部分も必然的に生まれ、存在していることは否定できません。今後、国際教育プログラムをより効率的、効果的に運営し、さらに予算の有効活用を図る意味においても、全学プログラムと学部プログラムを今一度整理し、それぞれのレベルでの実施が最も効率的で、効果的であるよう、調整することが必要でしょう。

第三の課題、そして今後の大学運営にとって最も重要な課題の一つに、正規の学生として海外の学生をより多く取り込むことが挙げられます。海外の学生を取り込む面において、本学も含めて日本の大学は諸外国の大学に比べて、積極性に欠け、制度的硬直性、意思決定の非効率性が指摘されます。このため、ターゲットとする地域の事情をより深く研究し、理解し、海外の大学、特にアジア諸国の大学に目を向け、謙虚に学ぶ姿勢が必要かと考えます。

世界は大きな転換期を迎えています。日本も、そして本学も大きな転換期に直面しています。本学の教育も、このような時代にふさわしく、世界の発展に貢献でき、また、世界の活力を本学の発展に取り入れ、さらなる発展を図る原動力の一つにすべく、国際交流事業は引き続き大きな役割を果たしていくことでしょう。

私の国際交流 — No Pain, No Gain —

第10代国際交流委員長 商学部教授 中野裕治

なかのひろはる

人生にはクリティカルな場面が何度か訪れる。その時の対応こそが、人生の糧ともなると言えよう。本学にて国際交流委員長を勤めた期間は、2002年から1期2年、2006年から2期4年の計3期6年間である。しかし、「国交30年」に寄せる個人的想いは、むしろ委員長時代以前にある。以下は私の国際交流体験談、3題である。

その1. 「いきなり通訳」—1983年4月15日午後、小生は米国からの訪問者バーナード・カーシュ（イリノイ州立大学）教授夫妻を天草へと案内し、夕方から予定されている講演会場（熊日本社地下一現ホテル日航あたり）へ向かっていた。長六橋あたりに差ししかかった頃、突如公用車に電話が入った。講演の通訳を予定していた田島司郎教授が体調を崩されたという。ついては申し訳ないが、中野君に代わって貰いたいとのこと。正直慌てた。開演まで約30分。「解りました」と答えるや、夢中で原稿を読み始めた。「経営理念と労働者対策：日米比較」、A-4で25頁の「論文」である。22頁目を読み終えた時に時間が来た。カーシュ教授と目を合わせ「よし行こう」と決めた瞬間だった。幸い教授の配慮で結論部分はユックリ、ハッキリ話してもらえたので、質疑を含めて無事に終えることができた。

その2. 「MSUでの講義」—1984年9月。第1回 Summer Exchange Program 研修団26名をロスアンジェルスで見送ったあと、小生はひとりボーズマンに戻ってきた。交換教員第1号としてMSUにて1年間過ごすためである。早速学科長のJ.C. ロジャース氏と面接して驚いた。カレンダーと称する分厚い年間講義目録に既に小生の名前と講義名が印刷されていたのである。慌てた。そして除（おもむろ）に切り出した。「日本語については講義するよう聞いて来たが、組織論については、直ちに始めるとは聞いていない。せめて1クォーター（3か月）だけ準備期間が欲しい。」結局、当方の主張が通り、日本語は通年、経営組織論については、冬と春の2クォーターの担当ということで決着した。こうして、日本語に加え、ビジネスコース・必修（BuMg421）4年生39名を対象に70分、週2回の講義を担当することになった。因みに小生は学生時代に英検1級を取得していたとはいえ、英語での講義はおろか、海外初体験だったのである。学んだこと。それは、確かに米国人

は無理を言うてくることもあるが、理を尽くして話せば解ってくれるし、存外フレキシブルだということである。ボーズマン滞在は、当時41歳の小生にとって貴重な1年となった。

その3. 「一足先の日中交流」—1986年夏。田島司郎教授と私は、深圳大学にて出発前に空輸しておいた書籍類が到着するのを待っていた。成人教育部の学生70名に対し、経営学を講義するための参考資料である。経営学総論（小生）と経営労務論（田島教授）を1日置きにやる。それぞれ通訳付きとは言え、朝9時から夕方5時までの長丁場である。期間は23日間。ようやく荷物が着いたのは、講義も終わり近くになってから。検閲に手間取ったらしい。結局手許の講義ノートで間に合ったとは言え、一時不安が過（よぎ）ったのは事実である。数年後、再訪した折に廖（りょう）校長から「先生たちから指導を受けた学生たちが、中央の幹部登用試験に多数合格しましたよ。」と聞かされた時には、正直報われたと思った。翌'87年本学と深圳大学の姉妹締結の礎（いしづえ）になったことは確かである。

その他、2002年創立60周年記念行事として開催された「環太平洋9大学学長シンポジウム」の司会をジョセフ・トーマイ先生と共に行ったこと。委員長在任中の姉妹校訪問や台湾・崑山科技大學との姉妹締結のことなど思い出は多い。これらの活動を通して、本学の国際交流活動に貢献したというよりも、むしろ小生自身が育ててもらった部分の方が、より大きかったと実感している。多くの若者が海外にてクリティカルな場面を体験し、大きく羽ばたいて呉れることを祈念して止まない。



MSU日本語教室にて 1985年5月(筆者中央)



国際交流の断片的思い出 － 2004 年から 2005 年の動き－

第9代国際交流委員長 外国語学部教授 **佐藤 勇 治**

第9代国際交流委員長として2004年から2005年の2年間の国際交流を担当した。この間の国際交流で記憶に残ることの一端を紹介し、当時の状況の記録とし、また今後の国際交流を考える資料としてもらえれば幸いである。

第一に協定校との交換学生数の不均衡問題の存在である。アメリカのモンタナ大学やウィスコンシン大学のようなところは、本学からの度重なる働きかけにもかかわらず、先方からの派遣学生が不足し、いずれ交換留学制度そのものが継続できないことが懸念されたため、私が大学を訪問して派遣を促したが、成果にはつながらなかった。

第二に協定校との協定更新にかかわる問題の処置と自動更新制度の拡充がある。協定更新については、その内容や条件に関し時として問題が生じるが、タイのチュロンコーン大学と一時調整に時間を要し、私がバンコクに飛び直接交渉を行い、1泊2日のあわただしい日程と疲労感で帰国したことが思い出される。また、当時の協定は一定期間ごとに更新するかどうかを見直していたが、学内の検討と相手との交渉にはかなりの時間と労力を要していたため、できるだけ自動更新制に改めるようにし、労務負担の軽減に努めた。

第三に派遣留学生の現地でのもめごとの解決に苦労したこともある。イギリスのアルスター大学に派遣した留学生と、その学生を受け入れたホストファミリーとの間に生じた問題に対する大学の対応が本学の求める対応と異なったため、国際交流センターの矢澤氏と共に現地に乗り込み先方の責任者と交渉するも、納得のいく対応を

得られず、残念な思いで帰国した。

第四に最も長い交流の歴史を持つ韓国の大田大学校との交流では、20周年記念行事を先方でやった直後ということもあり、本来なら先方で行う順番になっていた国際学術会議を本学でやったことが記憶に残っている。国際交流センターの職員の皆様には仕事を増やしてご迷惑をおかけしたが、結果的には成功し双方の一層の交流促進に寄与したものと思う。

第五に中国の大学との関係では特に改善したことはないが、相互理解の促進という意味で、4大学の表敬を兼ねた協議に赴いたことがなつかしい。中国事情に詳しい切通氏の通訳とご案内で充実した訪問となった。

第六に新規協定校の開拓という意味では何ら成果はなかったが、既存の協定校との問題の処理や良好なる関係にむけての若干の貢献はできたものと思う。

最後に、委員長時代の全般を通じて、多大なるご協力とご支援をいただいた国際交流センターの田中室長、岡村室長、喜佐田氏、切通氏、矢澤氏、国際交流委員会の皆様、他関係者の皆様に感謝申し上げたい。



学生研修団ベトナムコース団長として訪越 2005年

国際交流 30 年に寄せて

き さ だ とも こ
喜 佐 田 智 子

【2010年4月～2010年10月 国際交流センター事務室長】

本学の国際交流の歴史が30年を数えましたこと、心よりお祝い申し上げますと共に、その内の3分の2余りを共に歩めたことを光栄に思います。

第2代国際交流委員長の清野先生の時代から現在の司馬先生の時代まで一緒に仕事をさせていただきましたが、その間、本学の国際交流は発展充実し、そして変化してきました。

米国モンタナの大学との間で2ヶ月間の春期短期派遣留学生や1ヶ月間の学生研修団を相互に派遣し合っていた頃、本学の受け入れ態勢はまだ未成熟でしたが、当時の北古賀学長を先頭に、本学は熱い気持ちで国際交流に取り組んでいました。国際交流委員の先生方一人ひとりから意気込みが伝わり、事務室で働く私たちも時間を忘れ、皆一丸となって楽しんで仕事をしていました。草創期の活力に溢れていた時代だったと思います。

韓国の大田大学や中国の深圳大学とも姉妹校提携を結び、1年間の交換留学生制度確立後、奨学金制度だけでなく、留学生用宿舎や授業科目も整備されていき、協定校も本学学生の需要に合わせて調査・発掘されて増え、国際交流プログラムは充実していきました。その後、消えていった協定校やプログラムもありますが、現在10ヶ国・地域の18大学との交流を実施しています。

草創期の思い出は数えきれないほどありますが、発展・拡大期では、岩野学長時代に甲南大学から留学生研修団を10年間受け入れたことと、角松学長一行にお供してベトナム国家大学ハノイ校を訪問させていただいたことが特に印象深く心に残っています。

最近では、坂本学長時代に台湾にも協定校が生まれ、ベトナム同様、活力に溢れて発展している国や大学との交流ができることを嬉しく思います。そういった国や大学との交流を通じて本学の学生たちが学ぶことが多いと思うからです。

2012年5月、本学の創立70周年を祝うため、韓国・大田大学から理事長・総長はじめ諸先生方にお出いただきました。できるだけことはしたつもりですが、それでも2010年秋に大田大学校で催された華々しい

創立30周年記念式典やそのときの本学からの訪問団に対する同校の熱い受け入れには敵わないものでした。それは、大田大学校が力強く発展しておられ、本学との交流に熱い思い入れを持っておられることの証拠であり、そのような大学に本学の学生たちを派遣できることを心から有難く感じています。

2010年4月、国際交流センター事務室長になり、いよいよこれから熟成期を迎えた本学に相応しい国際交流の充実を図りたいと、その戦略の方向性を探り始めた矢先に半年で異動となり、殆ど何もやり遂げることができずに終わりましたが、上述したように本学には宝とも呼べる姉妹大学や協定校が数多くあり、これまでにそういった交流校との様々な国際交流プログラムを通じて成長した、数えきれないほどの卒業生と教職員がいます。

その礎のもとに、本学の国際交流が時代に相応しい変化を遂げ、更に充実して発展していくことを期待しています。



キャロル大学より「交換留学生」として迎えた
シェイ神父と 1996年



私の人生の枠を拡げた国際交流

にしむら れいじ
西村 禮二

【2008年4月～2010年3月 国際交流センター事務室次長（室長兼務）】

熊本学園大学国際交流 30 周年記念おめでとうござい
ます。衷心よりお祝い申し上げます。

私は、熊本学園大学を 2010 年に定年退職して 3 年
が経過します。これまで、国際交流レターを拝見して、
国際交流活動が益々、進化・発展していることを嬉しく
思います。大学職員として 37 年間在職しましたが、通
算 11 年間も実務担当者として国際交流に携わることが
できたことを今でも誇りに思っています。また、大学職
員生活での一番の良き思い出になっています。

私は 1987 年から 1992 年までの 5 年間の総務課国
際交流係長の時代と 2008 年から 2010 年までの 2 年
間の国際交流センター事務室次長（室長兼務）の時代を
振り返り、当時の国際交流について述べたいと思います。

1987 年は、全国の大学が国際化に急速に進んでいっ
た時代でした。本学の国際交流は 1982 年に始まった
ばかりで、「草創期」でした。「草創期」には、国際交流
委員会を中心として教職員は国際交流を前進させてい
こうとするエネルギーに溢れていました。そのような中
で姉妹大学とは交換教員、長期交換留学制度、学生研修
団を柱とする交流プログラムを本格的に軌道に乗せてい
くことが課題でした。

教員交流については、交換教員として授業を通し、学
生と交流を深めていただきました。個人的には教職員向
け語学講座を通して交流を深めました。その後も数名の
交換教員とは今も交流が続いています。

学生交流については、長期交換留学制度は本学、熊本
大学、モンタナ州立大学、モンタナ大学との四大学間交
流プログラムにより、1988 年度からモンタナ州立大学
へ派遣がスタートしました。派遣する交換留学生の単位
互換を保障する学内規程の整備が必要になり、原案作り
に携いました。それがモデルとなり、その後の姉妹大学
や協定大学に派遣する長期・短期交換留学生に適用され
ました。

受入れ交換留学生には、民間の賃貸アパートを宿舍と
して分散して利用せざるをえませんでしたので、管理面
では相当苦労しました。1998 年にやっと、念願の国際
交流会館が建設され、ハード面での問題が一応解決され
ました。受入れ交換留学生との交流は、宿舍問題などで
大変なこともありましたが、思い出に残る楽しいことも
ありました。

学生研修団は、1983 年にモンタナ州立大学システム
との隔年おき相互派遣に続いて、1987 年に初めて韓国・
大田大学校学生研修団を受け入れました。韓国への親近
感が今日のように盛んでない頃でしたのでホストファミ
リーの確保には苦労しました。関係ゼミ生や教職員、学
外交流団体の協力で無事、受け入れることができたこと
も忘れがたいことです。

国際交流の事務体制では、実務担当者は 1987 年
には私と喜佐田さんのわずか 2 名でしたが、アメリカの
大学に続いてアジアの大学との交流と私費留学生の急増
に伴い、1992 年までには太田さん、切通さんを加えて
計 4 名体制となりました。事務量は年々増加する一方
でしたが、スタッフの高度な実務能力と熱意そして献身
的な取り組みにより、いくつかの困難な課題も解決でき、
「草創期」の基盤作りに大いに寄与できたと思います。
事務組織は 1992 年に総務課国際交流室が国際交流セ
ンター事務室に昇格し、一層充実しました。国際交流は
1992 年から「拡大型」そして 2000 年以降は「充実期」
に入ります。私は 1996 年に総務部に異動しましたが、
幸いにも間接的に度々、国際交流に携わることができま
した。

2008 年に国際交流センター事務室で再度、国際交流
に携わることになりました。2009 年新型インフルエン
ザの世界的流行の影響により、姉妹大学等に派遣してい
る全ての交換留学生を迅速に一時帰国させることになり
ました。学長指揮の下、国際交流委員長、関係各課と連
携しながら、喜佐田さん、切通さん、矢澤さん、大洞さ
ん、田原さん、栗原さんらと全力を挙げて取り組み、解
決できました。この経験により、国際交流の危機管理体
制が一層、充実しました。

私は、国際交流に携わることにより、すばらしい人達
と出会い、そして貴重な体験をすることができました。
私にとっての国際交流は、人生の枠が大きく拡がり、人
生をさらに豊かにするものでした。

最後になりましたが、在職中にお世話になりました歴
代国際交流委員長、国際交流委員、国際教育課（当時：
国際交流センター事務室）職員、関係教職員の皆様方に
感謝申し上げます。今後、益々の国際交流の発展と充実
をお祈り致します。

私には不釣合いも、いい塩梅の充実期間でした

おかむらけんいち
岡村健一

【2003年10月～2008年3月 国際交流センター事務室長】

私の国際交流室勤務は2003年10月から約5年間でした。そのうちの特に中後半期は私にとってはいろいろな行事に振り回された期間だったかと思います。

はじめに、大学のアジア圏との関係では、2004年11月これまでは本学と韓国・大田大学の2大学でのユニバーシティ・コンファレンス(ユニ・コン)であった学術交流が、中国・深圳大学も加わる3大学ユニ・コンとして本学で開催されたことです。大きなシンポジウムとなり、国際交流委員長、ユニ・コン委員長、委員、事務スタッフは本当に忙しい期間となりました。2005年11月には北京第二外国語学院との協定調印式が、同12月には韓国・大田大学校との締結20周年祝賀会が本学で行われました。さらに2007年11月には中国・深圳大学で交流締結20周年記念式典が行われ、学長始め本学教授陣も招待を受け、そこで3大学ユニ・コンも開催されました。

ちょうどこの時期は世界中が景気下降状況になったことも原因なのか、英語圏の交流大学から協定書の内容見直し提案され、頻りに検討会議が行われました。しかし、うれしいこともありました。それは、カナダ・カールトン大学からの留学生が得意な冬スポーツをきっかけに、2007年2月にアイスホッケー部が発足したことです。その11月には九州リーグの三部リーグで優勝するなどすぐに成果を出し二部に昇格して大喜びでした。ちなみにそのアイスホッケー部は現在も存続しています、嬉しいことです。

留学生との係りでは、まず、国際交流会館で春・秋2回ずつ開かれる交換留学生の歓迎会と送別会のパーティーです。英語圏、アジア圏留学生を囲んで毎回100人以上の人数が参加します。会館には本学学生(留学に興味のある学生、留学を控えた学生、留学した学生、交換留学生と友達になった学生)のみならず、教員、卒業生や関係家族(子供含む)なども参加し、毎回大盛況です。このパーティー継続の裏には、心熱く留学生と接して頑張っておられる会館勤務者がおられるからこそこの賜物です。一方、外国人留学生との係りをみますと、当

時は交換留学生を含めて総数が140人をこえていましたので担当スタッフは大変でした。まだ学業に不慣れた学生には常に学業成績を確認したり、生活状況の把握と相談などコミュニケーション取りも欠かせず、互いに叱咤激励していました。特に、成績不安学生のビザ更新時などは、入国管理局の指導を受けながらの申請書提出には神経を使いましたが、彼らがめでたく卒業できた時は喜びもひとしおでした。

最後に、留学を目指す学生、これから留学する学生に対しては、日常の会話能力アップは必要不可欠ですが、できるなら何事にも興味旺盛になってほしいものです。それは、留学を終えて帰国した学生に話を聞くと、「日常会話は心配なくできるようになったが、外国の学生は母国のこと、政治、経済、社会、文化等にもちゃんと意見を持って話をするので、真剣な議論には意見が言えなかったことを反省した」とのことです。それを自覚した学生は大収穫だったでしょう。学生にはこれらを踏まえ、日々色々なことに興味を持ち、多くの情報をポケットに蓄積しておき、彼らといつでも議論できることを期待いたします。近ごろ海外への留学者数減少が報道されていますが、熊本学園大学は協定校との関係もちょうんとしていますので、安心して大いに飛躍してほしいものです。それでは、熊本学園大学の国際交流がますます発展、充実していきますことを願っております。



2006年秋来熊したカナダ・セントメアリーズ大学のマイクさんを送る(筆者は右から2番目)



私と国際交流

た なか かず ほ
田 中 和 穂

【1997年8月～2005年3月 国際交流センター事務室長】

国際交流センターに配属された1997年8月は、勝部委員長が提唱されていた国際交流プログラム改革案が既に教授会で承認され、協定校選定について国際交流委員会で盛んに議論が行われている時期でした。具体的な改革案とは、本学学生の留学先を拡大・充実させるために英語圏と中国語圏で長期交換留学が可能な協定校を増やす事でした。これは、次のルウィン委員長、その次の西園寺委員長の時まで続き、私もアルスター大学、カールトン大学を訪問し、非常に貴重な経験をさせていただきました。ルウィン委員長時代には、目覚ましく発展を遂げる東南アジアとの交流、その中でもタイ、ベトナムとの新協定校を探す事になりました。チュラロンコーン大学、ベトナム国家大学ハノイ校との協定が締結されるまでには紆余曲折があり、教授会でもなかなか承認されないという難産の結果生まれた協定校でした。両大学とも事前交渉で訪問しましたが、何しろタイやベトナムではトップクラスの大学でもあり、本学とはスケールも違う中で教授会が求める大学間協定に持っていくまでの委員長の苦労は大変だったと思います。センターに配属された1997年当時は4ヶ国6大学だった協定校も、就職部に異動した2005年には9ヶ国17大学に増えていました。

また、配属直後に国際交流会館が竣工されました。会館と言えば色んな思い出があります。当初は留学生と日本人学生との混住方式でしたが、建設費補助金絡みで急遽日本人学生を退居させるという事がありました。この事は当時の新聞にも掲載されましたが、以来、日本人学生が入居していない状況が続き、会館建設時の意義が活かされていないのは残念です。また、交換留学生の寮ですのでどうしても運営上のルールを厳しくせざるを得なく、留学生からはルール改正

の要望が毎年出され、話し合いはそれこそ労使間の団体交渉そのものでした。留学生の小さいルール違反は多々ありましたが、日本人学生が大きな違反を犯し退居処分をした事もありました。

学園創立60周年記念事業も思い出の一つです。本学協定校のうちモンタナ州立大学、モンタナ大学、キャロル大学、インカーネットワード大学、大田大学校、深圳大学、北京第二外国語学院、ベトナム国家大学ハノイ校を招き、「環太平洋9大学学長シンポジウム」や「国際学術コンファレンス」が開催されました。一度に約60名の海外からの来賓を招くのは本学としても初めてでしたので、職員の中から語学堪能な人を各大学の担当者に充て、約1週間の熊本滞在期間中はホテルの迎えから送りまで付きっきりで国際交流センター職員とともに頑張っていた事が懐かしい思い出です。

国際交流センターの8年間は、当然海外の方とのお付き合いも多く、すばらしい知人・友人を得ることが出来、私の大きな財産となっています。

最近は海外に目を向ける若者が減っていますが、これからも開かれた世界を目指してもっともっと本学の国際交流が発展することを祈念いたします。



ベトナム国家大学ハノイ校訪問・角松学長一行と（筆者は左から4番目）

「絆」の喜び

ほしこさぶろう
星子三郎

【1989年4月～1997年7月 国際交流センター事務室長】

本学は実に長い海外との繋がり、交流の歴史を持っていることを実感しています。学園70周年記念事業で出版された「近代熊本の巨人」（著者：徳永洋先生）に学園発足の様子が詳しく紹介されていますが、母体となる熊本海外協会の世界に羽ばたく若き英才の育成が根底に流れているのです。最近では、1980年9月熊本県のモンタナ州との交流から新たなその動きが始まりましたが、2年後には大学の訪問団が現地を訪れ姉妹校協定に調印、具体的な交流がスタートしました。1992年4月には国際交流センター事務室も組織され責任者を任せられました。まずは人の往来、協定に基づくものとはいえ受け入れ・派遣は当該者ごとに様々な対応が求められました。交換教員受け入れは単身・夫妻・家族での来学と様々ですが、子どもがいる場合は学校への就学問題も重要な受け入れ条件の一つでした。幼稚園に学ぶ子どもが早々と日本語をマスターするのは驚きでした。

担当者としてもっとも気をもんだのは留学生の受け入れ、派遣でした。交換留学生の受け入れには様々なトラブル対応がありました。未明に突然我が家への電話で起こされましたが、暑い夏に窓を完全に施錠せずに休んでいたら宿舎に侵入者があったとのことでした。すぐに駆けつけ、大事に至らずに胸をなでおろしました。特に欧米の女子留学生はカラフルな短パンにTシャツのいでたちで明るくオープンでした。英国からの元気の良い男子留学生が夜間に道路脇に駐車している車に下り坂道で自転車ごと後ろからぶつかり顔面打撲、前歯を折って熊本市市民病院に入院した折には帰国が遅れるハプニングもありましたが、周りの多くの日本人学生や留学生仲間の手厚い看護、お見舞いで友好の絆を一段と深めたことを思い出します。

国際交流委員会の配慮でいくつかの姉妹校を訪問する機会も得ました。1992年、初めて訪問した英国リバプールジョンモーズ大学は皆が知るビートルズの出身地にあります。彼らがエリザベス女王から勲章を戴き、リバプールに凱旋したときに市民の歓迎を受けたバルコニーにも立つ機会も得ましたが、リバプール港のアルバートドッグには彼らが世界のスターになる前に演奏活動を積んだお店がビートルズ記念館になっていました。世界の人々の心を捉え、一世を風靡したビートルズの音楽は今もメ

ロディーが流れると口ずさみたくなります。当時の姉妹校大学は決して広々としたキャンパスではありませんでしたが図書館を中心に活気がありました。週末になると学生が街なかのパブに集まって遅くまで踊ったり話し込んだりしているのも印象的でした。1988年、中国の姉妹校深圳大学を最初に訪れた折は深圳駅からの道路は土埃が舞い上がる状況で隣の香港の様子とは隔絶の感がありました。しかし、中国最初の経済特区としての役割を担い中国の新しい国づくり、発展に向けた確かな動きを感じ取ることが出来ました。既に、当地にも日本企業は進出していましたが、キャンパス内の野外音楽堂での催しのフィナーレにインターナショナルの曲が流れ、つい私たちも声を出して合唱したことは楽しい思い出です。帰国の際には蛇口から船で香港に渡ったのも驚きでした。隣国の韓国、大田大学校との国際交流は仕事としての対応は勿論のことですが、交換教員を初め多くの方々との人的な繋がりの中で沢山のことを学びました。1985年以来何度も往来をさせていただきましたが、その都度韓国流のおもてなしを受け、人々の生活観を教えられ、今も儒教の教えを尊ぶ若者・学生のマナーには驚愕しました。経済観念も私たちとは違っていました。

国際交流の仕事に携わり海外姉妹校の多くの方々との貴重な出会いをいただき、そして教えられました。国際交流は人の往来が何よりのベースであり、何よりの貴重な時間であることを様々な機会に実感しました。往来が絶えることなく脈々と続くことを祈念してやみません。国際交流の仕事をご縁に頂戴した多くの方々との「絆」に改めてこの欄をお借りして感謝申し上げます。



リバプールの王永江先生のご案内でチェスターのイーストゲート時計塔を訪問（筆者中央）



留学経験を活かす

外国語学部 英米学科 3年 しら かど ゆう すけ
白 角 勇 介

[2011年8月～2012年5月アメリカ・モンタナ州立大学へ交換留学]

私は、十ヶ月間、アメリカのモンタナ州立大学に留学していました。多くのことを学び、考え、貴重な日々を過ごすことができました。しかし、ただ留学をしたという実績だけでは、それを活かすことはできません。ただ留学をすることは誰にだってできます。大切なことは、留学経験を今後どのように活かしていくのかということなのです。私が留学をして得た、今後の生活に活かしていきたいと思うことを二つの観点から紹介しようと思います。

まず、留学経験をこれからの学校生活にどのように活かしていくか。アメリカでの学校生活を振り返ってみると、日本のものとは全く違いました。まず、学生たちの授業態度には驚きました。日本の大学で私が目の当たりにするような、授業中に眠っている学生、お喋りをしている学生、授業を聞かず他のことをしている学生はほとんどいなかったのです。みんな真面目に授業を聞いてノートをとり、積極的に発言し、わからないところがあつたら教授の話の食い止めてでも質問をしようとするのです。このような姿勢は日本の学生たちも見習うべきだと感じました。この経験を活かして、自分も日本の大学の授業を受けるときにもそのような姿勢で臨もうと思いました。ここはアメリカではないからそんなことはなくていいとか、他の学生がしていないから自分もしなくていい、といった考え方はしないようにしようと思います。もちろん、自分だけがそのような態度をとったからといって授業の雰囲気が変わるといったことはないかもしれませんが、他の学生が自分を見て、少しでも真似してくれようと思えばいいと思います。また、積極的な異文化交流もしていきたいと考えています。他の国々の大学からうちに来ている留学生と話をし、少しでも助けになれば嬉しいです。自分が留学していたときに感じた、不安やうまくいかないことを、自分なら理解することができると思うので、留学生の助けになりたいと感じています。

次に、留学経験を社会生活にどのように活かしていくか。企業のグローバル化が進む中で、英語を必要とするような企業は増えています。留学して手に入れた英語力というアドバンテージを活かせば、多くの企業に求められる人材となることができると思います。しかし、英語が必要のない企業で働く場合でも、留学経験はどこかで生きるものだと私は考えています。例えば、私は今コンビニでアルバイトをしているのですが、一見、英語なんか全く必要ない職場です。しかし実際には、英語圏やアジアの国々から来ているお客さんから英語で質問されたりすることもあります。それを英語で対応できたときに、留学をして良かったと、留学経験を活かせたという実感を得ることができました。また、それ以外にも、留学を通して身につけたコミュニケーション能力、問題解決能力、忍耐力など、これらはどのような職場においても活かせるものだと思います。働くことにおいてコミュニケーションをとるということは非常に大事なことですし、問題が発生したら自分でなんとかしなければなりません。仕事で辛いことがあつたとしても、留学していたころに比べれば全然楽だと考えれば、どんなことでも乗り越えることができると思います。このように、留学という経験は自分の基盤となって、どのようなときにも活かせるものだと私は思います。



パーティーで友人たちと（筆者は左）

韓国留学で得た経験

外国語学部 東アジア学科 4年 た じり あや
田 尻 彩

[2011年3月～2012年2月韓国・大田大学校へ交換留学]

私は中学生の頃から興味を持っていた韓国へ留学する事を目標に熊本学園大学へ入学しました。私にとって韓国の言語・文化・礼儀作法は大変興味深いものであり、東アジア学科で学習を深め、大学三年次に韓国留学への切符を手に入れました。

留学を通して一番感じた事は、韓国の学生は比較的日本人の学生に比べ、積極的に行動している事です。夢や目標のためなら苦勞を惜しまず行動し、チャンスを自分から生み出しに行っている姿には驚かされました。

留学当初の私は、‘韓国留学中に必ず韓国語能力試験の高級に合格する’という目標を立てていたものの、具体性がなく、全く進歩がありませんでした。しかし、毎日、韓国人と同じ授業を受講しながら行動を共にし、夢や目標に向かって積極的に行動し、前進している姿を見て、たくさん刺激を受けた私は、韓国語能力試験に合格するために一ヶ月毎の目標を立て、積極的に行動することを習慣付けて行きました。自分で一ヶ月毎に立てた目標を達成させるためには、何をすべきか考えて行動するように心がけました。韓国人学生たちが放課後に行っている討論会への参加や、一步韓国社会へ足を踏み入れ、大韓航空や社会福祉施設でのボランティア活動に参加しました。自分から積極的に行動して行く事で、学生だけではなく、子供から大人まで幅広い年代の方たちとの交流が増え、より実践的な韓国語を身に付けて行く事が出来ました。もちろん、いろんな職種、年代の方たちとの交流が深まれば深まる程、意見に相違が生じ、心が折れたり、時にはぶつかり合った事もあります。しかし、そこで互いにぶつかり合いながらも納得するまで話し合う事でもっとも仲が深まると同時に、コミュニケーション能力を身に付けて行く事が出来たのではないかと感じています。又、大田大学校では、世界各国からの留学生もたくさんいます。留学生だけが特別に受けられる韓国語の授業がある為、すぐに距離は縮まり、放課後はいろいろな言語が飛び交う中、一緒に勉強したり、お互いの言語を教え合ったりしました。又、大学で‘フードフェスティバル’という行事が行われた際にも、たくさんの韓国人学生にそれぞれの‘母国の味’を紹介するために留学生が一丸となって準備した事もありました。留学先では韓国人だけでは無く、さまざまな国の人たちとも交流出来るのも留学の魅力の一つではないかと感じます。

私は今、客室乗務員として安全で快適なおお客様の旅のお手伝いをしております。私がこのように、かねてからの目標であった客室乗務員になれたのも、この留学で得た経験のお陰だと感謝しております。今後は、留学で身に付けた韓国語も活かしながら日本のお客様だけではなく、韓国や海外のお客様へも日本という国を発信していきたいと考えております。どんな所においても積極的に学ぶ姿勢を忘れず、目標達成に向けて日々努力し前進していきたいです。



ソウルでのボランティア活動（筆者は前列右）

経験を活かして

経済学部 国際経済学科 2年

ひがし
東 あき
晃 ひろ
弘

【2012年3月短期語学ホームステイプログラムに参加】

私は昔から英語が一番苦手な教科で、いつも英語から逃げてきました。この短期語学ホームステイプログラムに参加することで、もっと英語と向き合い、英語力をつけ、同時に外国の文化に触れることで日本での変な価値観や偏見を変えたいと思いました。

ホームステイは最初不安もありましたが、ホストファミリーはとても親切で優しくだったので気軽に話せてとても楽しかったです。しかし、何を言っているかわからないことがよくあり、そんな時は文字を書いて詳しく説明してくれました。またホストファミリーが Scouts という青少年運動の団体のリーダーをしていたので、現地の子どもたちと一緒にカヌーをしたり室内スポーツをしたり、なかなか出来ない体験ができました。現地の大学でのクラスは国、人種、年齢の全然違う留学生でみんな仲良くなりました。みんな母国語が英語ではないので言葉に詰まりながらでしたが、一生懸命英語でお互いの国の言葉を教え合ったりして盛り上がりました。このような何気ない会話をしている時も、もっと勉強して世界中の人たちと色々な会話が出来ようになりたいと感じました。ここで出来た友達は今も Facebook で繋がっています。また次に会う時は英語ですらすら話せるようになりたいです。日本に帰国してからはマステン先生のゼミで留学生と仲良くなり一緒に遊んだり English Lounge でゲームをしたりしています。また課外講座で英会話や TOEFL の勉強をしています。

ニュージーランドへの短期語学ホームステイプログラムに参加して実際に色々な国の人と話して日本人が嫌っている国の人も本当はとってもいい人たちがたくさんいると感じました。(understand) という言葉通り同じ立場に立たないと理解できないことが沢山あります。この経験を活かし英語の勉強は勿論、何事にも積極的に参加し自分の価値観を広げたいです。



同じクラスの友達と（筆者は中央）

深めたい国際理解

社会福祉学部 子ども家庭福祉学科 4年

はし
橋 もと
本 ゆい
唯

【2012年3月短期語学ホームステイプログラムに参加】

2012年3月からの1か月間、ニュージーランドへの短期語学ホームステイプログラムに参加しました。日本の生活しか知らない私にとって初めて見るものや経験することはばかりで、戸惑いと感動がいっぱいの充実した毎日となりました。

その中でも特に刺激的だったのは、現地での大学生活です。韓国、中国、サウジアラビア、ベトナム、イランなど様々な国籍のクラスメイトと共に授業に参加し、またカフェでお茶したり遊びに行ったりして仲良くなる中で、私自身他の国に対して無意識のうちに偏見を持っていたことに気付かされました。例えばアジア隣国ですが、政府間での揉め事やあまり好印象でない報道を頻繁に目にしており、留学前はあまり良い印象を持っていませんでした。しかし私のクラスメイトは皆とても親切でフレンドリーで、国の風習や言葉、文化等は違えど根本は日本人と何ら変わりないと感じました。

目の前にいる人が親指を立てたら、私たち日本人は“グー！！”良い意味のサインと受け取ります。しかし世界にはブーイング、悪い意味のサインと受け取る国の人々もいます。育った環境が違えばものの捉え方も自然と異なるため、衝突が起こったり、相手の考えを受け入れられないようなことが起こるのも当然のことだと思います。しかし今回の経験を通して、異なる価値観を否定的な目で見るとはなく、認め合い、違いを楽しむことがこれから私たちに出来る大切なことだと思います。外国文化やものの考え方に興味を持ちながら、同時に日本のことについても他国の友達に発信していければと思います。



クラスメイトと一緒に（筆者は左から2番目）



異文化を感じましょう

カン
韓

ショウ
簫

【2011年3月～2012年2月中国・深圳大学交換留学生】

私は、2011年3月から2012年3月まで交換留学生として熊本学園大学に留学しました。短い1年間が終わり、たくさんの楽しい思い出ができました。日本の文化や風景を実感しただけでなく、多くの日本人の友達と出会うことができよかったですと思っています。

帰国して8ヵ月の後、逆にホームシックになり母国での生活に慣れることに苦勞をしました。熊本学園大学での留学経験があるため、就職は問題なくできました。また、今後の大学院進学にそなえ準備をしていますが、熊本で過ごしたあの一年間の経験は非常に役に立つと思っています。留学の経験を通して次の目標に挑戦しています。充実した留学生活ができ、助けてくれた方々に心から感謝と申し上げます。

私は、深圳大学管理学院経営学科を専攻しましたが、日本文化にたいへん興味があったため日本語を独学していました。熊本学園大学に留学できたおかげで、経営学の知識も日本語の能力も上達し、更に日本の歴史や地理もだんだんと分かるようになりました。

熊本学園大学の優れた先生方のお陰で日本の経営学を勉強できました。「ホスピタリティーと企業戦略」という授業で日本のホスピタリティーはどうなっているかについてクラスの学生とチームを組んで、下通りにあるイギリス人のバーを訪れました。店長を対象として取材し、外国人としてどうやって日本人にワインを売るのかという質問を巡って皆でパワーポイントを作成しました。(結果を発表したほうが効果あり。)こんな面白い授業は、私にとって初めてだったと思います。大学で学んだことを実際に社会で使ってみる。緊張感と共によさを実感できました。これこそ熊本学園大学商学部の授業の魅力ではないかと思っています。

また、日本人の友達や熊本学園大学の国際交流会館に住んでいた外国人の友達からたくさんの異文化を学びました。私たち交換留学生は、言語は異なりますが、そのため互いに相手の文化を理解し合いました。文化圏が違うため、日本人の友達に対しどう対応すべきか、欧米圏の友達にはどう対応すべきかと色々質問しました。たと

えばプレゼントをもらう時、直ちに中身を見るかどうかは、日本人と欧米人に対する礼儀はまったく違うと気づきました。各文化の礼儀だけではなく、よく友達と話して日本語と英語の能力を伸ばしました。

この一年間で、私は日本のいろいろなところを回り、日本各地の知識も歩きながら少しずつ理解しました。2011年の夏休み、一人で九州から北海道まで旅行し、忘れられない思い出を作りました。伝統的な社寺が多い京都、リズムが速い大都市の東京や広くてきれいな北海道など、日本の各地を訪れ、日本の素晴らしさを実感しました。特に福島の避難所や宮城県の海岸を訪ねたとき、ボランティアとして地元の方々とケーキを作ることができ、楽しい体験でした。現実の日本社会に触れて、その思い出を大切にしたいと思っています。

短い一年間の留学生でしたが、いろんな異文化が分かり、留学前と比べれば、より深く日本文化の理解ができました。熊本学園大学の方々に再び心から感謝を申し上げます。

留学生活が終わっても、もっと広い世界を訪れ、世界の人々や文化に触れたい夢があります。また、去年のようにたくさんの友達をつくり、異文化体験をしていきたいと思っています。

世界の素晴らしさ、人生の素晴らしさ、まだまだ楽しみにしています。



熊本学園大学 70周年を記念して

私が食べ物から学んだこと

ケルシー マクベール
Kelsee McVey

【2011年9月～2012年8月】

アメリカ・インカーネットワーク大学交換留学生】

熊本学園大学での留学は、最高の経験でした。

留学中に、私はたくさんの友達を作り、日本文化を習いました。熊本に行く以前は、日本についてあまり知りませんでした。その当時の知識は、アニメからのものでした。しかし、日本人の友達と時間を過ごすにしたがって、徐々に知識が広がりました。特に、食事を共にすることから、多くを学びました。

日本料理の美味しさは、世界中で有名です。私は毎日和食を楽しみました。和食はアメリカの料理とは全く違うと思いました。(今では、私の一番好きな食べ物はあんこです！)

国で特有の料理は、その国の国民性をよく表していると思います。

鍋物やしゃぶしゃぶは日本人の心の広さです。外国人にとって日本人は、引込み思案であるというイメージがあると思いますが、私にとっては、優しいイメージが大きいです。このことは、鍋のような共用の食事に、よく表れていると思います。一般的に、アメリカ人は友達同士でも、他の人と食べ物を分け合って食べることをしません。アメリカ人は自分の分は自分で全部食べたがりです。一方、日本人は友達や家族とよく食べ物を分け合うことがあります。日本人は食べ物という、人間にとって無くてはならないものを共有するのです。

お弁当は、家庭生活についてたくさんことを表していると思います。日本人は勤勉で毎日せいっぱい頑張っています。小学生でも頑張って勉強しています。家族はそれぞれ忙しいですが、絆は強そうです。一家の母親が家族のためにお弁当を作り、子供に愛情をかけます。

日本料理のシンプルな美しさは日本の文化を代表しています。作ることは簡単ではありませんが、日本料理は簡素な美味しさがあります。美しく、すっきり見える食品を作ることに、重きを置いています。日本人はこのように食事を大切にしています。彼らは自分自身に注意を引かないようにしています。彼らは静かで控えめですが、このことはきれいで優雅です。

ラーメンもまた、日本の独特の文化です。日本に来る前は、すべてのラーメンは同じだと思っていました。ラーメンには多くの種類があることを知りませんでした。ところが、地域によってさまざまな種類があります。熊本と博多のラーメンは違いますし、また、東京と札幌のラーメンも違います。日本のことをあまり知らない人は、全国のラーメンの味や、各地の日本人の性質が均一だと誤解するようです。さまざまな都市でラーメンの味が違うように、(京都と大阪のように、たとえ地域が近くても) 地方によって気質が違います。これを県民性といいます。この違いは人生を面白くし、日本の文化に味を加えます。

日本での留学はとても楽しかったのですが、私にとって勉強より友達と一緒に食事することから、多くを学びました。普通の大学生として生活したことは、一番大事な思い出です。将来、私は大学と大学院を卒業後、日本に戻りたいと思います。新しい友達を作り、新しい生活を始め、やはり美味しい食べ物を食べます！



授業で茶道を体験

留学経験から将来の夢へ

ディン ティ ホン スエン
Dinh Thi Hong Duyen

【2011年4月～2012年3月】

ベトナム・ベトナム国家大学ハノイ校交換留学生】

私が日本に「さようなら～」といった日からあつと言う間に、もう8ヶ月が過ぎました。その日からいつも熊本と日本で身につけた経験を活かそうとしながら、引き続き学生生活を過ごしています。

初めに、「母国から少し離れたところで見れば、母国のことが一段と分かるようになって、前より役に立つ人になるはずだ!」。長くはない一年間の留学経験は、私にそういうことを教えてくれました。つまり、学園大での留学中に私の心の中に日本に対する愛着が深くなるほどベトナムを日本のような国にしたいという想いも強くなってきたということです。

それより重要なのはその想いを実現することなので、私は帰国してから、自分なりに一所懸命に勉強して、ベトナムで活躍したいと決まっています。

まず、日本語学科の学生である私に対して、第一の任務は何といても日本語の勉強です。留学前は日本語の勉強はほとんどCDや本を通じ、日本人と話す機会が少なかったため、聴解力も会話力も弱い学生でしたが、今は日本語で大体うまく会話できる自信がある4年生になりました。毎週、大学で日本語の通訳、翻訳の授業がありますが、前より自信があり、積極的に意見を出します。このように留学経験は、今私の学生生活にすく役に立っていると言えます。

そして、日本語が難しすぎ、日本語を嫌いだと思ったことがある私ですが、一方で日本語に美しさを感じ、日本語の意味をより深く理解するため、日本語を研究したり、母語と比較したりしたいという意欲もあります。その意欲を実現するためには、私はこの学年で、日本語文法に関するテーマで日本語学科の科学研究活動に参加し、日本語について卒業論文を書く予定があります。もちろん、資料が揃っていないベトナムで日本語を研究するのは難しいですが、強い意欲があれば、何とかできると思って頑張りたいと思います。

しかし、学校の勉強だけでなく、仕事の勉強も必要です。そう思った私は学園大でキャリアデザインや日本語文章表現などの授業に出てみましたが、思ったより面白かったです。それらの授業を通じて、履歴書の自分の「売り」や仕事の志望動機をはっきり日本語で書いて、インタビューなど就職活動に必要なスキルもしっかり身につけました。それを活かして、今年の夏休みに日本語のコミュニケーターの仕事ができました。仕事ではよく日本人と会話するので、留学の時に日本人との挨拶や話す経験もよく活用できます。これからも日本人との仕事にはいろいろなことが勉強になっていくと期待しています。

日本語能力のある人になるため、大学卒業後、できれば日本の大学院に入り、日本語をもっと高いレベルで勉強したいと思っています。それから、ベトナムで社会人として日本語に関する仕事で活躍するという夢を目指しています。

最後に、学園大で留学したからこそ、私はこれからの夢がいっぱいな人になりました。それは将来ベトナムと日本の架け橋のように役に立つ日本語の教師、通訳者にになりたいことや日本の社会、文化、自然などの美しさをもっと発見したいという夢です。

さあ、あなたも学園大での留学を体験してみましょう。



来日すぐに訪れた熊本城

熊本での良い縁、良い思い出

大田大学校教授 パク フン シック
朴 興 植

【2011年3月～2012年2月韓国・大田大学校 交換教員】

구마모토에서의 좋은 인연, 좋은 추억

대전대학교 박흥식

저는 대학 시절 일본어를 제 2외국어로 공부하면서 일본에 대한 관심이 많은 학생이었습니다. 일본어를 맨 처음 접한 후 한 세대인 30여년이 지난 후 교환교수로서 1년 동안의 일본생활에 대한 기대와 기쁨은 매우 컸습니다.

3월 초 학장님 및 많은 교직원님들의 환대로 시작한 일본 생활은 처음에는 긴장의 연속이었습니다. 그러나 두 달이 지나자 어느 정도 적응이 되어 일본어도 늘었고 학생들과도 친해지게 되었습니다. 그러자 여행을 하고픈 생각이 들었고 멀게는 오키나와를 비롯 東京 및 부근의 닛코, 가마쿠라, 관서지방의 교토와 오사카, 그리고 가깝게는 큐슈지역의 일곱 개 현(県) 모두를 살펴 볼 수 있는 기회를 가졌습니다. 한국과 닮은 듯 다른 일본의 아름다운 자연, 잘 보존된 문화재, 그리고 친절하고 상냥한 일본인들을 보고 많은 것을 배우고 느낄 수 있었습니다. 그 중 한국과 일본의 오랜 교류 및 역사를 보여 주는 인상 깊은 곳이 있습니다.

먼저 구마모토 시내에 있는 蔚山町駅입니다. 시내 북쪽에 위치한 本妙寺를 방문하던 길에 접한 '울산'이라는 낯 익은 한국의 지명이 반가웠지만 구마모토성(城)의 축성을 위해 이 곳에 오게 된 울산사람들의 사연 그리고 한일 양국간 아픈 역사가 남아 있는 곳이었습니다. 이후 저는 구마모토시와 울산시가 자매시(姉妹市) 관계가 있음을 알게 되었습니다. 그리고 작년 10월에는 구마모토성에서 이를 기념하는 행사에도 참여함으로써 이제는 서로를 이해하고자 하는 노력과 모습을 현장에서 볼 수 있게 되어 좋았습니다. 이와 함께 한국식 山城의 모습을 볼 수 있는 山鹿市の 鞠智城이 기억에 남아 있습니다. 7세기 일본의 文武天皇시대 백제(百濟)가 멸망한 후 귀족들이 이 곳으로 건너와 축성하였다는 이 성은 한국과 일본의 오랜 역사와 친밀한 관계를 떠오르게 하는 장소였습니다.

일본에서의 생활은 제 인생에서 가장 소중한 순간으로 기억될 것입니다. 저의 마음 속에는 언제나 친절하고 따뜻하게 대해 주셨던 많은 분들의 얼굴과 모습이 그대로 남아 있습니다. 구마모토학원대와 그 곳에서 맺은 좋은 인연 언제나 간직하고 있겠습니다. 감사합니다.

私は、大学時代に第二外国語として日本語を勉強し、日本に対して関心の高い学生でした。初めて日本語に接して四半世紀あまりの後、30余年を過ぎて交換教員として1年間日本で生活をするというその期待と喜びはたいへん大きなものでした。

3月、学長をはじめとする多くに教職員の皆さんの歓迎を受け始まった日本での生活は、当初緊張の連続でした。しかし、2ヶ月が過ぎると次第に慣れ、日本語も上達し、学生らとも親しくなりました。

すると旅行などもしてみたいと思うようになり、遠くは沖縄、東京やその近郊の日光や鎌倉、関西地方の京都や大阪、そして近くは九州7県すべてを見てまわる機会が訪れるのを待ちました。

韓国と似ているようで異なる日本の自然美、よく保存

されている文化財、そして親切でやさしい日本人から多くのことを学び、感じる事ができました。

その中で韓国と日本の長い交流と歴史が私に深い印象を残した場所があります。まず、熊本市内の蔚山町駅です。

熊本市内の北に位置する本妙寺に向う途中で「ウルサン」という見覚えのある韓国の地名を思い起こさせる名を目にしました。熊本城築城のため、ここに来ることになったウルサンの人々の歴史、そして韓日両国のいたみの歴史が残っている場所でした。

その後、私は熊本市とウルサン市が姉妹都市であることを知りました。昨年10月には熊本城において両市の姉妹都市締結を記念する行事が開催され、私も参加しました。お互いを理解しようと努力する姿をこの目で見る事ができうれしかったです。

また、韓国式の山城を見ることが出来る山鹿市の鞠智城も印象に残っています。7世紀文武天皇時代に百済が滅亡した後、貴族たちがこの場所に渡り築城したというこの城は、韓国と日本の長い歴史と親密な関係を思い起こさせる場所でした。

日本での生活は、私の人生において最も貴重な瞬間として記憶されるでしょう。

私の心の中にはいまでも親切で温かく接してくださった多くの方々の顔と姿がそのまま残っています。

熊本学園大学とここで結ばれた良い御縁をいつまでも大切に心にしまっていきます。

ありがとうございます。



清水寺にて (筆者は右)

弱肉強食でない、共に生きる社会

社会福祉学部 福祉環境学科 1年

オウ
王

ワラベ
童



日本社会において、私は外国人登録書（在留カード）なしには、一步も外に出られない身である。「王」という名字は、私をソトの人間として直ちに切り分けることを可能にし、オーダーメイド以外では、印鑑の入手不可能だと思っていた。

私は故国にいた頃、自分が自分であることに疑問を抱いていなかった。大きな不自由もしていなかった。家族も親戚も友人も含め、ウチは「平穏」だった。

しかし、来日して立場は一変した。私は外国人という枠のマイノリティに属し、絶対数としては多くない社会的弱者への福祉を学ぶこととなった。すると、それまで自分には全く目に入っていなかったことが見えてきた。それに、包括的なアカデミックな勉強を開始したことで、今までの自分の経験に意味づけがなされ始めた。例えば、しょうがいを持った人に「社会の役に立たない」と意識上の烙印を押し、まだまだウチに閉じ込めたままにしてしまいがちな自分の国の姿に、胸を痛めずにはいられなくなった。なぜなら、ここではしょうがいを持った人を「積極的に雇用しよう」という企業の動向をみて取れたし、集団生活を送る彼らと実際にふれあい、その懸命さや明るさに感銘を受けたからだ。

また、過去から学ぼうと56年経った今も風化させまいとする水俣に関する多くの取り組みが行なわれているかと思えば、他方で、国の経済発展に過度に重点を置く政策の弊害で、満足のいく補償を受けられない公害の犠牲者がいることは、目をつぶりたくなる事実だ。ほかにも、ゼミのテーマで在日コリアンに関して自分なりに見解を深めているところであるが、その歴史的背景に深く彩られた悲しい過去は、私に回族である友人や中国で8%を占める55の少数民族のことを思い起こさせ、今までの自分の彼らへの無関心さに腹を立てるしかなかった。なぜなら、「見て見ぬふりをする」ことが暴力になりえることに今の私は危惧を感じるからだ。

振り返ってみると、私の人生の転換期に、今後を考える上での重要なヒントがあると思う。私は、中高一貫教育の芸術学校で舞踊を専攻し、その後舞踏劇団に所属し

てプロのダンサーとして生計を立てた。外国からの観光客が多かったことから、一念発起し英語を話せるようになり、その後シェラトン西安ホテルで働き、世界中からやってくる人々と出会うことを次なる生業とした。今は日本語を学び、大学に在籍し、文字で発表するチャンスもいただいた。ダンスにはじまり、英語から日本語と手段は変遷したが、気づけば様々な表現方法が私を成長させてきた。

私がここにいる意味、それはこのグローバルともボーダレスとも言える現代社会の日本で、多様な人がいることを知ってもらい、自分の存在で体現する。また、少数派の声に耳を傾けて代弁するなど、自分から発信していくことで繋いでいくことではないかと感じている。そのための方法論は、母国語も含めたツールで、発言や表現の場に積極的に参与していくことだ。いろんな人が共生可能で、かつ調和の取れた社会の形成に微力ながらも寄与することが、今まで培ってきた己の表現方法を活かすことになり、正に今こそ、学んできた成果を社会に還元していくべき時ではないかと思う。そして、将来的には、抱える問題の種類や大小などそれぞれ異なるが、日本で学んだモデルを故国の実状に沿ったよう軌道修正を加え実用化することで、母国の問題の改善案を示しうる人になりたいと考えている。



着物の体験



国際交流写真館

Ekiden



Kimono Experience



Kumamoto City Fire Service



Welcome & Farewell Party



Sports Festival



Field Trip



新協定校紹介 セントラル・ランカシャー大学（イギリス）

セントラル・ランカシャー大学（University of Central Lancashire・略称 UCLan）は、ロンドンからヴァージン・トレインで2時間、イギリス北西部プレストンの市街地にあります。現在の大学は1992年に創立され、前身のInstitution for the Diffusion of Knowledgeまで遡ると約200年の歴史を持つ国立大学です。約32,000人の学生が500をこえる学士課程と約180の修士課程で学んでいます。

2011（平成23）年10月に現地視察と相互協議を行い、翌年2月に交流協定を締結。今年の秋学期には、UCLanからの第1期交換留学生3名を迎えました。



第22回外国人留学生弁論大会

外国人留学生弁論大会が2012（平成24）年6月9日（土）、熊本学園大学412教室（4号館1階）で開催され、今年は5カ国13名の留学生が参加した。会場は、学生をはじめ、学内関係者のみならず、地元住民らで賑わった。

最優秀賞は、「日本人と弁当ー明日への活力、コミュニケーションの形」をテーマにスピーチをした中国からの留学生王童さんが受賞。儉約のために始めた弁当作り。しかし、日本人にとって弁当とは、とても大切な相互間のコミュニケーションの原点のようなものではないかと日本人の弁当にかける情熱について熱く語った。

王童さんは、最優秀賞のほか、聴衆の投票によって選ばれるオーディエンス賞も見事獲得した。

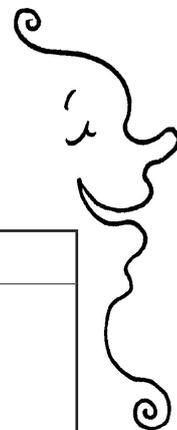


<後列左から> 司馬周国際交流委員長、金景玟、全韓植、安東慶、ケルシー・マクベ、孫浩然、王童、宮崎麻美国際交流委員（審査員）、商学部川田亮一先生（審査員）
<前列左から> ビクトリア・エレラ、ミワコ・ヨココ、タッサニー・バー・マンアリー、ディンティトゥー、張清杰、王虹雲、張小曼

審査結果

最優秀賞	福祉環境学科1年	オウ 王	ワラベ 童	(China) (中国)	日本人と弁当ー明日への活力、 コミュニケーションの形	
優秀賞	国際経済学科3年	オウ 王	ヨウ 虹	ウン 雲	(China) (中国)	夢に翼を
	経営学科2年	チョウ 張	セイ 清	ケン 杰	(China) (中国)	私の第二の家族
敢闘賞	英米学科4年	マンアリー・タッサニー・バー Mool-Aree, Tadsaneepapha		(Thailand) (タイ)	同性愛者	
	英米学科2年	ヨココ Yokoo	ミワコ Miwako	(USA) (アメリカ)	再チャレンジ	
オーディエンス賞	福祉環境学科1年	オウ 王	ワラベ 童	(China) (中国)	日本人と弁当ー明日への活力、 コミュニケーションの形	

平成 24 (2012) 年 海外往来



	派遣プログラム	受入プログラム
1月	ラトローブ大学 (高木大地)、セント・メアリーズ大学 (三好香織・勝田絵美)、北京語言大学 (北川誉)、北京第二外国語学院 (渡辺雄二)、北京外国語大学 (淋勝輝)、大田大学校 (小西史織、家入麻梨子) 帰国 ユニテック工科大学 (松平百合恵、林田彩里) 出発	
2月	大田大学校 (島津直希、田尻彩)、深圳大学 (濱田智恵、米村麻里菜) 帰国 北京第二外国語学院 (河村拓也)、深圳大学 (谷方秀美、山崎誠)、北京語言大学 (竹原僚一)、北京外国語大学 (井手孝則)、ラトローブ大学 (安戸仁美、竹村夏美、荒木美聡)、ベトナム国家大学ハノイ校 (永江志保) 出発	大田大学校 (姜炫求、金旻瑩、南承妍、尹惠榮)、モンタナ州立大学 (ジェフリー・ブロックウィック、ジェニファー・ジョーンズ) 帰国 大田大学校 (朴興植先生) 交換教員帰国
3月	大田大学校 (佐藤由貴、田中優衣、向田早希、岩下桃子、岡部彩夏、坂梨紗也加) 出発 短期語学ホームステイプログラム [ユニテック工科大学 (25名) 3/2 ~ 3/26]	ベトナム国家大学ハノイ校 (ディン ティ ホン ズエン)、深圳大学 (羅夢霞、韓簫)、北京第二外国語学院 (鄧喬生) 帰国 大田大学校 (金景玟、金榮雨、孫浩然、安東慶、全韓植、蔡潔眞)、深圳大学 (張小曼、王虹雲)、北京第二外国語学院 (張清杰)、クライストチャーチ・ポリテクニク工科大学 (ケーデンス・ベドフォード) 来熊
4月	セント・メアリーズ大学 (吉里南麗沙) 帰国	ベトナム国家大学ハノイ校 (ディンティトゥー) 来熊
5月	モンタナ州立大学 (赤星愛美、奥畑千愛、白角勇介)、インカーネットワーク大学 (久木田麻衣、濱田依里) 帰国	
6月	セント・メアリーズ大学 (横山綾乃)、リバプールジョンモーズ大学 (元山由希)、ベトナム国家大学ハノイ校 (永江志保) 帰国	
7月	ラトローブ大学 (荒木美聡) 帰国	
8月	モンタナ州立大学 (高柳吉乃、前川彩乃、守田美里)、キャロル大学 (茨木彩月)、インカーネットワーク大学 (花田朗寿、林明日香)、ウィスコンシン大学オークレア校 (後藤優希、山口緑)、セント・メアリーズ大学 (原田結佳、山田玲実)、リバプールジョンモーズ大学 (植原好史) 出発 モンタナ州立大学 (神本忠光先生) 出発 大田大学校 (朴哲洙先生) 出発	モンタナ州立大学 (ターナー・コルビン)、インカーネットワーク大学 (ビクトリア・エレラ、ケルシー・マクベア、カスリン・ガブリエル、ミワコ・ヨコオ)、セント・メアリーズ大学 (アレクサンダー・メイ)、カールトン大学 (アンナ・ファスト)、リバプールジョンモーズ大学 (ダニエル・バツターワース、アンドリュー・ケンダル)、チュラロンコン大学 (タッサニーバパー・マーンアリー)、崑山科技大學 (頼品秀) 帰国
9月	リバプールジョンモーズ大学 (原口理衣)、崑山科技大學 (小北花子) 出発	モンタナ州立大学 (テリー・マクアリスター、アダム・バルツ)、カールトン大学 (トニー・ディン)、リバプールジョンモーズ大学 (ライアン・キレン)、セントラル・ランカシャー大学 (ヘザー・フレーザ、サム・デイビズ、ミア・コレット)、チュラロンコン大学 (タナナン・ダンパチック) 来熊
10月		
11月		ユニテック工科大学 (サラ・マシュー、キャサリン・スチュワート、ギー・ショネル、万江) 来熊
12月	ラトローブ大学 (安戸仁美、竹村夏美)、ユニテック工科大学 (松平百合恵、林田彩里)、ウィスコンシン大学オークレア校 (後藤優希、山口緑) 帰国	ユニテック工科大学 (サラ・マシュー、キャサリン・スチュワート、ギー・ショネル、万江) 帰国

2012 (平成 24) 年度 出身国・地域別外国人留学生在籍者数

春学期

(5月1日現在)

国籍 (国・地域名)	学部学生					研究生			大学院生					交換 留学生	合計	
	1	2	3	4	計	学部	院	計	1	2	博1	博2	博3			計
アメリカ															5	5
イギリス															2	2
カナダ															2	2
韓国									1					1	6	7
中国	9	9	6	10	34				4	14	1	1	2	22	3	59
台湾				1	1										1	2
タイ															1	1
ベトナム															1	1
ニュージーランド															1	1
合計	9	9	6	11	35	0	0	0	5	14	1	1	2	23	22	80

【9カ国・地域 80名】

秋学期

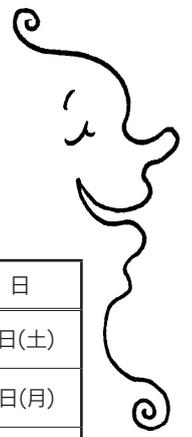
(10月1日現在)

国籍 (国・地域名)	学部学生					研究生			大学院生					交換 留学生	合計	
	1	2	3	4	計	学部	院	計	1	2	博1	博2	博3			計
アメリカ															2	2
イギリス															3	3
カナダ															1	1
韓国									1					1	6	7
中国	9	9	6	10	34	1		1	4	11	1	1	1	18	3	56
台湾				1	1	1		1								2
タイ															1	1
ベトナム															1	1
ニュージーランド															1	1
合計	9	9	6	11	35	2	0	2	5	11	1	1	1	19	18	74

【9カ国・地域 74名】

※ 「留学」の在留資格を持っている学生のみ。

2012 (平成 24) 年 留学生参加行事



名 称	主 催	内 容	期 日
第34回学長杯争奪駅伝大会	熊本学園大学第一部学生自治会 体育常任委員	留学生女子チーム参加	1月7日(土)
成人式	日本現代和装研究会	着物の着付けと式典出席	1月9日(月)
小学校交流-中国の食習慣-	富合小学校	文化講義と交流会	1月22日(日)
ユネスコ能楽ワークショップ	熊本ユネスコ協会	能面の体験・仕舞の鑑賞など	1月28日(土)
第18回 米国人留学大学生との交流会	熊本日米協会	米国人留学生と協会員との交流	1月30日(月)
第30回熊本春節祝賀会	熊本県日中協会	中国人留学生と協会員との交流	2月21日(火)
ユネスコ文化財を見る会	熊本ユネスコ協会	天草へのユネスコ会員との小旅行	2月26日(日)
第18回定期演奏会 GREEN CONCERT 2012	熊本学園大学 グリーンフィルハーモニックオーケストラ	クラシックコンサート	2月26日(日)
熊本市広域防災センター見学	熊本学園大学 国際教育課	防災センターで消防事情講話と 地震・台風・火災体験	4月5日(木)
新入生歓迎バスハイク	熊本学園大学国際教育課	阿蘇烏帽子岳登山・足湯体験	4月30日(月)
ウェルカムパーティー	熊本留学生交流推進会議	新入留学生との交流会	5月12日(土)
第22回 外国人留学生弁論大会	熊本学園大学国際交流委員会	本学留学生の日本語による弁論大会	6月9日(土)
熊本留学生バスツアー	熊本市観光文化交流局 シティプロモーション課国際室	熊本の名所を巡るバスツアー	7月15日(日)
第35回 火の国祭りおもやん総踊り	「元氣だ!くまもと」 観光事業実行委員会と熊本市	コンソ熊本・留学生チームとして参加	8月4日(土)
お盆体験ホームステイin長崎	国際交流協会西端塾	長崎の家庭へのホームステイ	8月12日(日) ~8月16日(木)
秋津公民館での市民交流	秋津公民館	「中国」についての講話と交流会	9月12日(水)
中秋節の夕べ	熊本市国際交流振興事業団 熊本県日中友好協会	日中交流文化イベント	9月16日(日)
国慶節祝賀会	熊本県華僑総会	中国人留学生を招いての交流会	10月1日(月)
熊本市広域防災センター見学	熊本学園大学 国際教育課	防災センターで消防事情講話と 地震・台風・火災体験	10月18日(木) 11月30日(金)
ウェルカムパーティー	熊本留学生交流推進会議	新入留学生との交流会	10月21日(日)
体育祭	熊本学園大学体育常任委員会	体育祭へ参加	10月27日(土)
秋の新入生歓迎バス旅行	熊本学園大学国際教育課	宮崎高千穂峡・五ヶ瀬ワイナリー	10月31日(水)
託麻祭	熊本学園大学第一部学生自治会	学園祭	11月1日(木) ~11月3日(土)
JRC高校生メンバー国際交流会	日本赤十字社熊本県支部	高校生との交流会	11月4日(日)
留学生シンポジウム	熊本留学生交流推進会議	「留学生に聞いてみよう!」 ~世界のゆく年くる年~をテーマに発表と 餅つき体験	12月8日(土)
秋津公民館での市民交流	秋津公民館	「ベトナム」についての講話と交流会	12月12日(水)
外国人留学生のための 就職説明会	熊本県	外国人留学生の採用を考える 企業を交えての就職説明会	12月15日(土)
留学生スポーツ交流会	熊本学園大学第一部学生自治会 学生議会	本学日本人学生と留学生との スポーツ交流と懇親会	12月22日(土)

交換教員往来



かみ もと ただ みつ
神本忠光先生
(外国語学部教授)

2012年9月から1年間
交換教員として
アメリカ・モンタナ州立大学へ



ハク チョルス
朴哲洙先生
(経済学部教授)

2012年9月から1年間
交換教員として
韓国・大田大学へ

平成24(2012)年度 研修団往来

〈受入〉

研修団名	研修期間	団員数
第13回大田大学校学生代表団	8月9日(木)～8月11日(土)	学生20名、引率3名

〈派遣〉

研修団名	研修期間	期間	研修・派遣先	団員数
経済学部国際事情研修 ニュージーランドコース	8月4日(土)～8月30日(木)	27日間	ユニテック工科大学	9名
経済学部国際事情研修韓国コース	8月4日(土)～9月1日(土)	29日間	韓国外国語大学	7名
経済学部国際事情研修中国コース	7月28日(土)～8月28日(火)	32日間	上海外国語大学	3名
外国語学部海外研修アメリカコース	7月22日(日)～8月20日(月)	30日間	ペセル大学	26名
外国語学部海外研修韓国コース	7月31日(火)～8月27日(月)	28日間	梨花女子大学校	21名
外国語学部海外研修中国コース	8月4日(土)～8月31日(金)	28日間	吉林大学	22名

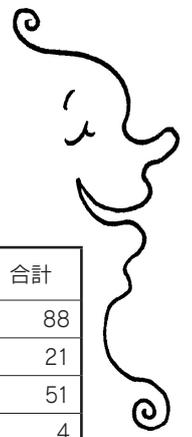
〈海外への派遣学生数〉

	派遣先大学名	平成24(2012)年度		平成23(2011)年度まで			
		交換	短期交換	交換	短期交換	HSP*	短期派遣
アメリカ	モンタナ州立大学	3		60			25
	モンタナ大学			21			
	キャロル大学	1		28			22
	ロッキーマウンテン大学						4
	インカーネットワーク大学	2		28			
	アワーレディオブザレイク大学(熊本市交流事業)			7			
カナダ	ウィスコンシン大学オークレア校		2	10			
	セント・メアリーズ大学	2		22	2		
イギリス	カールトン大学			10			
	リバプールジョンモーズ大学	2		39	11		91
	アルスター大学			8			19
フランス	セントラル・ランカシャー大学						
	リヨン商科大学			2			
	ポワチエ大学			1			
ドイツ	ラインランド・プファルツ州立経済大学						16
オーストラリア	ラトロブ大学	2	1	25		124	
ニュージーランド	ユニテック工科大学	2		24	7	103	14
	クライストチャーチ・ポリテクニク工科大学						
韓国	大田大学校	6		61			
中国語圏	深圳大学	2		48			
	中国人民大学			8			
	北京外国語大学	1		10			
	北京語言大学	1		9			
	北京第二外国語学院	1		6			
	広西師範大学(熊本市交流事業)			9			
	崑山科技大學	1					
ベトナム	ベトナム国家大学ハノイ校	1		5			
タイ	チュラロンコン大学			4			
	合計	27	3	445	20	227	191

※注1 網掛けの協定校は現在交流を行っていない大学
 ※注2 短期派遣留学(2ヶ月派遣)は平成18年度をもって終了
 ※注3 短期交換留学(1学期派遣)は平成20年度開始
 ※注4 短期語学ホームステイプログラムは平成24年度の実施なし

*短期語学ホームステイプログラム

国際交流派遣の記録 1982年～2012年



	派遣先大学	交換	短期交換	短派遣	HSP	モンタナ サマーP	学 生 研修団	合計
アメリカ	モンタナ州立大学	63		25				88
	モンタナ大学	21						21
	キャロル大学	29		22				51
	ロッキーマウンテン大学			4				4
	インカーネットワード大学	16						16
	インカーネットワード大学 (熊本市交流事業)	14						14
	アワーレディオブザレイク大学 (熊本市交流事業)	7						7
	ウイスコンシン大学オークレア校	10	2					12
	合 計	160	2	51				213
カナダ	セント・メアリーズ大学	24	2					26
	カールトン大学	10						10
	合 計	34	2					36
イギリス	リバプールジョンモーズ大学	41	11	91				143
	アルスター大学	8		19				27
	セントラル・ランカシャー大学							
	合 計	49	11	110				170
フランス	リヨン商科大学	2						2
	ポワチエ大学	1						1
	合 計	3						3
ドイツ	ラインランド・プファルツ州立経済大学			16				16
	合 計			16				16
オーストラリア	ラトロープ大学	27	1		124			152
	合 計	27	1		124			152
ニュージーランド	ユニテック工科大学	26	7	14	103			150
	クライストチャーチ・ポリテクニク工科大学							
	合 計	26	7	14	103			150
韓国	大田大学校	67						67
	合 計	67						67
中国語圏	深圳大学	50						50
	中国人民大学	8						8
	北京外国語大学	11						11
	北京語言大学	10						10
	北京第二外国語学院	7						7
	広西師範大学(熊本市交流事業)	9						9
	崑山科技大學	1						1
	合 計	96						96
ベトナム	ベトナム国家大学ハノイ校	6						6
	合 計	6						6
タイ	チュラロンコーン大学	4						4
	合 計	4						4
合 計		472	23	191	227	128	265	1306

※交換＝交換留学(1年)、短期交換＝短期交換留学(1セメスター)、短派遣＝短期派遣留学(約2ヶ月)

HSP＝短期語学ホームステイプログラム(約4週間)

モンタナサマーP＝モンタナ研修サマープログラム(約4週間)

学生研修団＝韓国コース、中国コース、タイコース、中国・ベトナムコース(約1週間)

国際交流受入の記録 1982年～2012年

	派遣元大学・機関	1年	1学期	合計
アメリカ	モンタナ州立大学	49	11	60
	モンタナ大学	2		2
	キャロル大学	18	2	20
	ロッキーマウンテン大学			
	インカーネットワード大学	5		5
	インカーネットワード大学（熊本市交流事業）	21	3	24
	アワーレディオブザレイク大学（熊本市交流事業）	6		6
	ウイスコンシン大学オークレア校			
	合 計	101	16	117
カナダ	セント・メアリーズ大学	15	1	16
	カールトン大学	10		10
	合 計	25	1	26
イギリス	リバプールジョンモーズ大学	37	34	71
	アルスター大学	2		2
	セントラル・ランカシャー大学	3		3
	合 計	42	34	76
フランス	リヨン商科大学		1	1
	ボワチエ大学			
	合 計	0	1	1
ドイツ	ラインランド・プファルツ州立経済大学	8		8
	合 計	8	0	8
オーストラリア	ラトロープ大学	4	5	9
	合 計	4	5	9
ニュージーランド	ユニテック工科大学	6	11(4)	21
	クライストチャーチ・ポリテクニク工科大学	1		1
	合 計	7	11(4)	22
韓国	大田大学校	96		96
	合 計	96	0	96
中国語圏	深圳大学	48		48
	中国人民大学			
	北京外国語大学			
	北京語言大学			
	北京第二外国語学院	7		7
	熊本市・桂林市 交流事業	10		10
	崑山科技大學	2		2
合 計	67	0	67	
ベトナム	ベトナム国家大学ハノイ校	12		12
	合 計	12	0	12
タイ	チュラロンコーン大学	8		8
	合 計	8	0	8
合 計		370	68(4)	442

※ユニテック工科大学（4）は2012年11月～12月受入れ

INTERNATIONAL EXCHANGE PROGRAM COMMITTEE MEMBERS

国際交流委員会メンバー

国際交流委員長 Chair	司馬 公周 SHIBA, Koshu	
商学部 Faculty of Commerce	杉田 憲道 SUGITA, Norimichi (~2012年12月)	土井 文博 DOI, Fumihiro
	喬 晋建 QIAO, Jinjian (2013年1月~)	
経済学部 Faculty of Economics	中敷領 孝能 NAKASHIKIRYO, Takayoshi	宮崎 麻美 MIYAZAKI, Asami
外国語学部 Faculty of Foreign Languages	ジョセフ トウメイ TOMEI, Joseph	土井 浩嗣 DOI, Hirotsugu
社会福祉学部 Faculty of Social Welfare	山西 裕美 YAMANISHI, Hiromi	藤本 延啓 FUJIMOTO, Nobuhiro
大学院 Graduate School	藤田 昌也 FUJITA, Masaya (2012年10月~)	花田 昌宣 HANADA, Masanori (2012年10月~)
国際教育課 Office of International Education	上田 信行 UEDA, Nobuyuki	切通 しのぶ KIRITOSHI, Shinobu

OFFICE STAFF MEMBERS

国際教育課スタッフ

課長	上田 信行 UEDA, Nobuyuki
課長補佐	切通しのぶ KIRITOSHI, Shinobu
係長	大澤 孝 OSAWA, Takashi
	北原かおり KITAHARA, Kaori (2012年10月~)
	大洞 時子 OHORA, Tokiko
	田原亜矢子 TAHARA, Ayako
国際交流会館 (事務室)	栗原 隆昭 KURIHARA, Takaaki

熊本学園大学 国際交流レター 2012 vol.34
編集・発行 熊本学園大学国際教育課
カ ッ ト 大洞 時子



〒862-8680 熊本市中央区大江2丁目5番1号

TEL 096-364-5161(代)

FAX 096-372-4112

[ホームページ] <http://www.kumagaku.ac.jp/>